

# 山王遺跡 11

— 山王遺跡第 13 次調査の報告 —

2020

福岡市教育委員会

# 山王遺跡 11

- 山王遺跡第 13 次調査の報告 -



調査番号 1735  
遺跡略号 SNN-13

2020  
福岡市教育委員会



## 序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、本社建築に伴う山王遺跡第13次発掘調査について報告するものです。この調査では住居跡、井戸などの遺構を検出するとともに、弥生時代から中世にかける遺物が多数出土しました。これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社 翔葉 様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和2年3月25日

福岡市教育委員会  
教育長 星子 明夫

## 例言

1. 本書は、福岡市教育委員会が2017・2018年度（平成29・30）に福岡市博多区山王2丁目において本社建設に伴い行った埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は福岡市教育委員会が行い、調査担当は井上蘭子・三浦悠葵・中園将祥が行った。
3. 遺構実測は井上、三浦、中園、藤野雅基が行った。
4. 出土遺物の整理は田中朋香、箱嶋ひかりが行い、遺物実測は三浦、平田晴美、立石真二が行い、写真撮影は井上、三浦、中園、製図は三浦が行った。
5. 今回の調査・報告に係る座標は都市再生街区基本調査により設置された基準点を使用しており、図中に使用した方位は国土座標（世界測地系）の座標北である。
6. ガラス玉、石製勾玉、ガラス埴塼の分析は福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎の協力を得た。
7. 遺構の呼称は略号化し、竪穴建物をSC、井戸をSE、溝をSD、土坑をSK、貯蔵穴をSU、柱穴・ピットをSP、不明遺構をSXとした。
8. 貿易陶磁器の分類は『太宰府条南 XV』太宰府市の文化財第49集を参考とした。
9. 今回の調査に伴う出土資料および記録類は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、利用に供する予定である。

遺跡名前	山王遺跡	調査回数	13回
遺跡調査番号	1735	遺跡略号	SNN-13
地番	福岡市博多区山王2丁目30-1.2	分布地図番号	37（東光寺）
調査対象面積	1040㎡	調査面積	1685㎡
調査期間	平成29（2017）年11月27日～平成30（2018）年7月27日		

# 目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	
2. 調査の組織	
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	2
第3章 調査の記録	2
1. 調査の方法と経過	2
2. 調査の概要	3
3. 遺構と遺物	13
(1) 住居跡	13
(2) 井戸	22
(3) 貯蔵穴	37
(4) 土坑	39
(5) 柱穴群	42
(6) 溝	44
(7) その他の遺構・遺物	46
4. 山王13次調査出土資料の保存科学的調査	49
第4章 小結	52

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3	第22図 SE01～03 実測図 (1/40)	22
第2図 調査区位置図 (1/4,000)	4	第23図 SE04 実測図 (1/40)	23
第3図 山王遺跡第13次調査区範囲図 (1/1000)	4	第24図 SE04 出土遺物実測図 (1/3)	23
第4図 遺構全体図 (1/200)		第25図 SE05～07 実測図 (1/40)	24
第5図 遺構範囲図 A～C区 1～3列 (1/80)	5	第26図 SE05 出土遺物実測図 (1/3)	24
第6図 遺構範囲図 A～C区 4～6列 (1/80)	6	第27図 SE07 出土遺物実測図 (1/3)	25
第7図 遺構範囲図 A～C区 7～8列 (1/80)	7	第28図 SE08～10 実測図 (1/40) SE08 ・09 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	26
第8図 遺構範囲図 D～F区 1～3列 (1/80)	8	第29図 SE10 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	27
第9図 遺構範囲図 D～F区 4～6列 (1/80)	9	第30図 SE11・12 実測図 (1/40) SE11・12 出土遺物実測図 (1/3)	28
第10図 遺構範囲図 D～F区 7～8列 (1/80)	10	第31図 SE11・12 出土遺物実測図 (1/3)	29
第11図 遺構範囲図 西区 (1/100)	11	第32図 SE13～18 実測図 (1/40) SE17 出土遺物実測図 (1/3)	30
第12図 遺構範囲図 南区 (1/100)	12	第33図 SE015・18 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	31
第13図 SC01～03 実測図 (1/60)	13	第34図 SE19・20 実測図 (1/40)	31
第14図 SC04～13 実測図 (1/60)	14	第35図 SE21・22 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	32
第15図 SC03・04・10 出土遺物実測図 (1/3)	15	第36図 SE23 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3・1/4)	33
第16図 S14～17 実測図 (1/60) S16 出土遺物実測図 (1/2)	16	第37図 SE24・25 実測図 (1/40)	34
第17図 SC18 実測図 (1/60)	17	第38図 SE24 出土遺物実測図 (1/3)	34
第18図 SC19・20 実測図 (1/60)	18	第39図 SE25 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	35
第19図 SC19・20 出土遺物実測図 (1/3・1/4)	19	第40図 SU01～04 実測図 (1/40)	37
第20図 S21～25 実測図 (1/60) S25 出土遺物実測図 (1/60・1/40)	20	第41図 SU01 出土遺物実測図 (1/3・1/4)	38
第21図 S22・24・25 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	21		

第42図	SK01～07実測図(1/60)……………	39
第43図	SK08実測図(1/60) SK02・03・08出土遺物実測図(1/3・1/2)……	40
第44図	SK10～16実測図(1/40)……………	41
第45図	SP01～09実測図(1/60)……………	43
第46図	SP10・11実測図(1/60)……………	44

第47図	S001～05実測図(1/40・1/60) S001出土遺物実測図(1/3)……	45
第48図	SX01実測図(1/40)……………	46
第49図	その他の遺物①(1/3・1/4)……………	47
第50図	その他の遺物②(1/3・1/2)……………	48

## 図版目次

PL.1	1) A・D区全景(西から) 2) B・C・E・F区全景(西から)
PL.2	1) A-1区全景(西から) 2) A-2区全景(西から) 3) A-3区全景(西から) 4) A-4区全景(西から)
PL.3	1) A-5区上層全景(西から) 2) A-5区下層全景(西から) 3) A-6区全景(東から) 4) A-7区全景(東から)
PL.4	1) A-8区全景(東から) 2) B-1区全景(東から) 3) B-2区全景(東から) 4) B-3区全景(東から)
PL.5	1) B-4区全景(東から) 2) B-5区全景(東から) 3) B-6区上層全景(東から) 4) B-6区下層全景(東から)
PL.6	1) B-7区全景(東から) 2) B-8区全景(東から) 3) C-1区全景(北から) 4) C-2区全景(西から)
PL.7	1) C-3区全景(東から) 2) C-4区全景(西から) 3) C-5区全景(東から) 4) C-6区全景(西から) 5) C-7区全景(東から) 6) C-8区全景(西から)
PL.8	1) D-1区全景(西から) 2) D-3区全景(西から) 3) D-4区全景(西から) 4) D-5区全景(西から)
PL.9	1) D-6区全景(西から) 2) D-7区全景(東から) 3) D-8区全景(東から)
PL.10	1) E-1・2区全景(南から) 2) E-3区全景(西から) 3) E-4区全景(西から)
PL.11	1) E-6区全景(西から) 2) E-7区全景(西から) 3) E-8区全景(西から) 4) F-1区全景(東から) 5) F-3区全景(西から) 6) F-4区全景(東から) 7) F-5区全景(西から)
PL.12	1) F-6区全景(西から) 2) F-7区全景(西から) 3) F-8区全景(西から) 4) 南区北東側全景(西から) 5) 南区西側全景(西から)
PL.13	西区全景(北西から)
PL.14	1) SE04(東から) 2) SE05(南西から) 3) SE09(北東から) 4) SE08土器1(北から) 5) SE10土器5・8出土状況(南東から) 6) SE11・12(南東から) 7) SE13・14(南から)
PL.15	1) SE15(西から) 2) SE16(西から) 3) SE17(東から) 4) SE17馬骨検出状況(東から) 5) SE23(北から) 6) SC06・07(南西から) 7) SC08(南西から)
PL.16	1) SC09(東から) 2) SC11(南西から) 3) SC12(北から) 4) SC23・24(北から) 5) SC17(北西から) 6) SC18(南東から)
PL.17	1) SC22・23(北から) 2) SC25内焼土検出状況(北から) 3) SC25内焼土(北から) 4) SC25内焼土(北から) 5) SC25内焼土(北から) 6) SC25内焼土土層断面(東から) 7) SU01(北から) 8) SU04(北西から)
PL.18	1) SC04遺物8 2) SE05遺物5 3) SE07遺物1 4) SE07遺物2 5) SE10遺物4 6) SE10遺物5 7) SE10遺物8 8) SE11・12遺物2 9) SE11・12遺物3 10) SE11遺物1 11) SE15遺物1 12) SE15遺物2 13) SE15遺物1 14) SE15遺物2 15) SE15遺物3
PL.19	1) その他の遺物① 5) 2) その他の遺物① 11) 3) 西区出土石器 4) その他の遺物② 15) 5) その他の遺物② 16) 6) その他の遺物② 18) 7) その他の遺物② 19) 8) その他の遺物② 21)
PL.20	1) SC17遺物1 2) SC22遺物2 3) SE10遺物10 4) SC25遺物9 5) SE05遺物7 6) SE23遺物7 7) SE25遺物10 8) SK05遺物3 9) SK09遺物7 10) その他の遺物② 24) 11) その他の遺物② 31) 12) その他の遺物② 32) 13) その他の遺物② 33) 14) その他の遺物② 35) 15) その他の遺物② 36)

# 第 I 章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区山王二丁目 3 番 5 における翔葉本社建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 28 年 6 月 22 日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である山王遺跡に含まれていることから、確認調査が実施され現地表面下 110cm で遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、本社建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成 29 年 11 月 21 日付で株式会社翔葉を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年 11 月 27 日から発掘調査を、令和元年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

## 2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託 株式会社 翔葉

調査主体 福岡市教育委員会

(発掘調査:29～30年度・資料整理:令和元年度)

調査総括	文化財活用部埋蔵文化財課	課長	常松 幹雄 (29年度)
			大庭 康時 (30年度)
			菅波 正人 (元年度)
		同課調査第 2 係長	大塚 紀宜 (29・30・元年度)
庶務	文化財活用部文化財活用課	管理係長	藤 克己 (29・30・元年度)
		同管理係	松尾 智仁 (29・30年度)
			松原加奈枝 (元年度)
事前審査	文化財部埋蔵文化財課	事前審査係長	本田浩二郎 (29年度)
		主任文化財主事	池田 祐司 (29年度)
		事前審査係	吉田 大輔 (29年度)
	文化財活用部埋蔵文化財課	事前審査係長	本田浩二郎 (30・元年度)
		主任文化財主事	田上勇一郎 (30・元年度)
		事前審査係	中尾 祐太 (30年度)
			朝岡 俊也 (30・元年度)
調査担当	文化財活用部埋蔵文化財課	主任文化財主事	井上 籬子
		文化財主事	三浦 悠葵
		埋蔵文化財調査員	中園 将祥

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

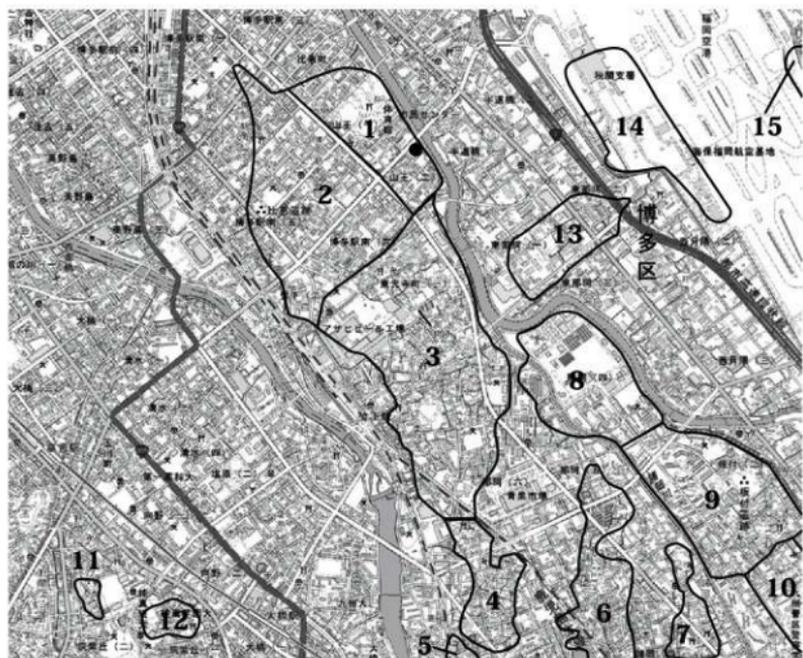
山王遺跡の位置する福岡平野は北を玄界灘に面し、西を油山から北へ発達する丘陵に、東を大城山から北西方向にのびる月隈丘陵によって囲まれた沖積平野である。福岡平野の中央部には博多湾に向かって北西に流れる御笠川と那珂川があり、二つの川に挟まれた地域は、阿蘇山火砕流によって形成された烏栖ローム層、八女粘土層を基盤とする洪積台地が、春日市須玖から福岡市博多区博多駅南地区にかけて延びている。この台地は、奴国の王墓があり中心部と目される春日市の須玖遺跡群から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと続き、博多湾の海岸砂丘に連なり、板付遺跡、比恵・那珂遺跡群などの重要な遺跡が密集しており、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が複合的に展開する。

今回調査の対象となった山王遺跡は、この台地の最北端の標高5～10mに位置する比恵遺跡群と、その東を北周する御笠川に挟まれた低位段丘上に立地する。遺跡の範囲は東西が160～300m、南北が650mの逆台形状をなす。山王遺跡の人跡の初現は後期旧石器時代である。縄文時代は晩期前半まで、石器や土器片などが断片的に出土し、突帯文期には遺構が検出されるようになる。弥生時代は前期に丘陵縁辺を中心に集落が営まれる。中期になると集落は丘陵全域に広がり、青銅器の鑄型が出土し、工人集団の工房が確認されるようになる。また、集落の周辺には墓域が形成される。古墳時代になると、台地状を縦断する道路が南北方向に敷設される。山王遺跡と一連の遺跡と目される那珂遺跡群では那珂八幡古墳が造営され、それらを中心に墓域や集落が展開してゆき、また古墳時代後期以降には大型の掘立柱建物や櫓列が確認されることから、「那津官家」との関連が指摘されている。古代には遺跡内の各地で正方位の規則的な区画溝や掘立柱建物群が確認され、「那珂郡衙」との関連が指摘されるなど、官衙に関係する遺構群がみられるようになる。中世以降には台地上に大溝などで区画された遺構が散見され、居館などが展開していた可能性が指摘されている。大溝は特に14～16世紀にかけて検出されており、室町時代から戦国時代における居館の造営が想定される。

## 第Ⅲ章 調査の記録

### 1. 調査の方法と経過

発掘調査の対象範囲は、予定建造物の地下への影響が及ぶ敷地全域である約1684.7㎡を対象とした。既存建物の基礎部分が格子状に残存していたことと、残土処理の為、調査区は建物基礎ごとに記号化し、横列をA・B区…、縦列を1・2列…と呼称した。それぞれの調査区を交差する名称からA-1区・A-2区…とし、A-1区からF-8区までを設定した。また上記の列に対応しない調査区は、方角から西区、南区と呼称し、A・D・西区、B・C区、E・F区、南区の順に調査を行った。発掘調査は、当初本社ビル建設予定範囲のみであったため、平成29年11月27日から平成30年4月27日にかけてA区から西区を行った。つづいて駐輪場建設予定地が追加調査地となったため、平成30年5月28日から南区の調査を開始し、同年7月27日に調査を終え、埋戻しを行い全ての作業を終了した。

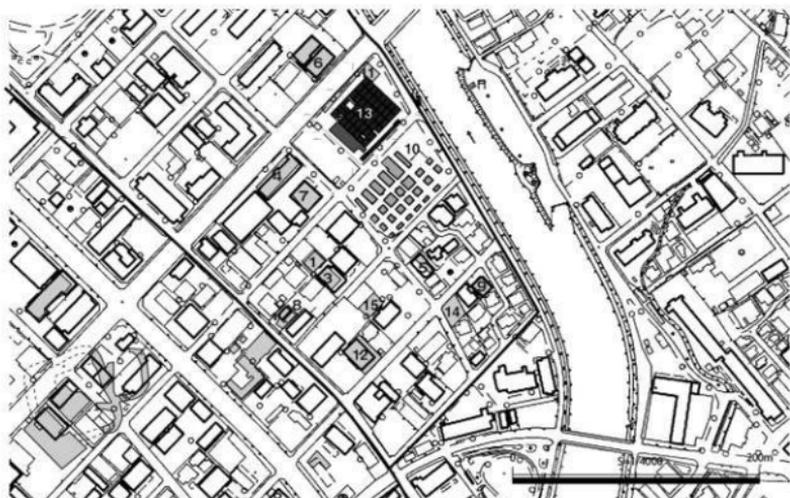


1.山王遺跡 2.比恵遺跡群 3.那珂遺跡群 4.五十川遺跡 5.井尻A遺跡 6.諸岡A遺跡 7.諸岡B遺跡 8.那珂君休遺跡  
9.板付遺跡 10.高畑遺跡 11.和田B遺跡 12.野多日遺跡 13.那珂東遺跡 14.雀居遺跡 15.久保岡遺跡 ●:13次調査地点

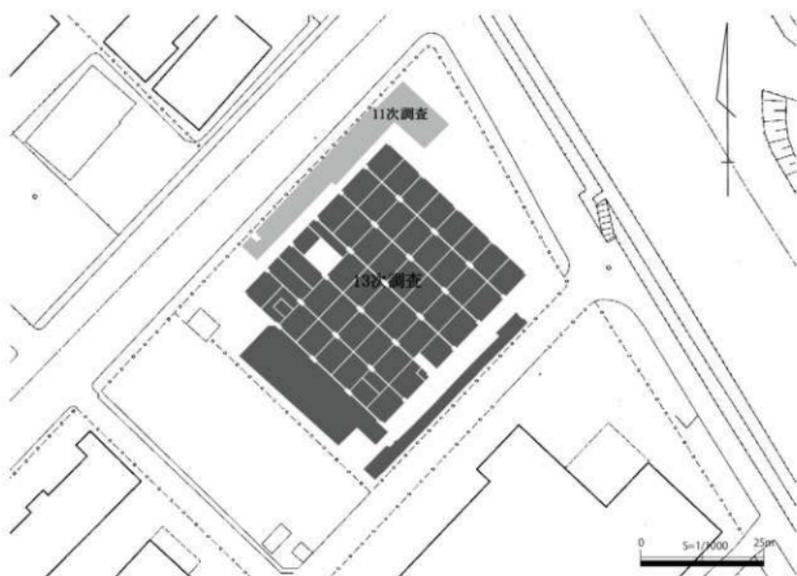
第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

## 2. 調査の概要

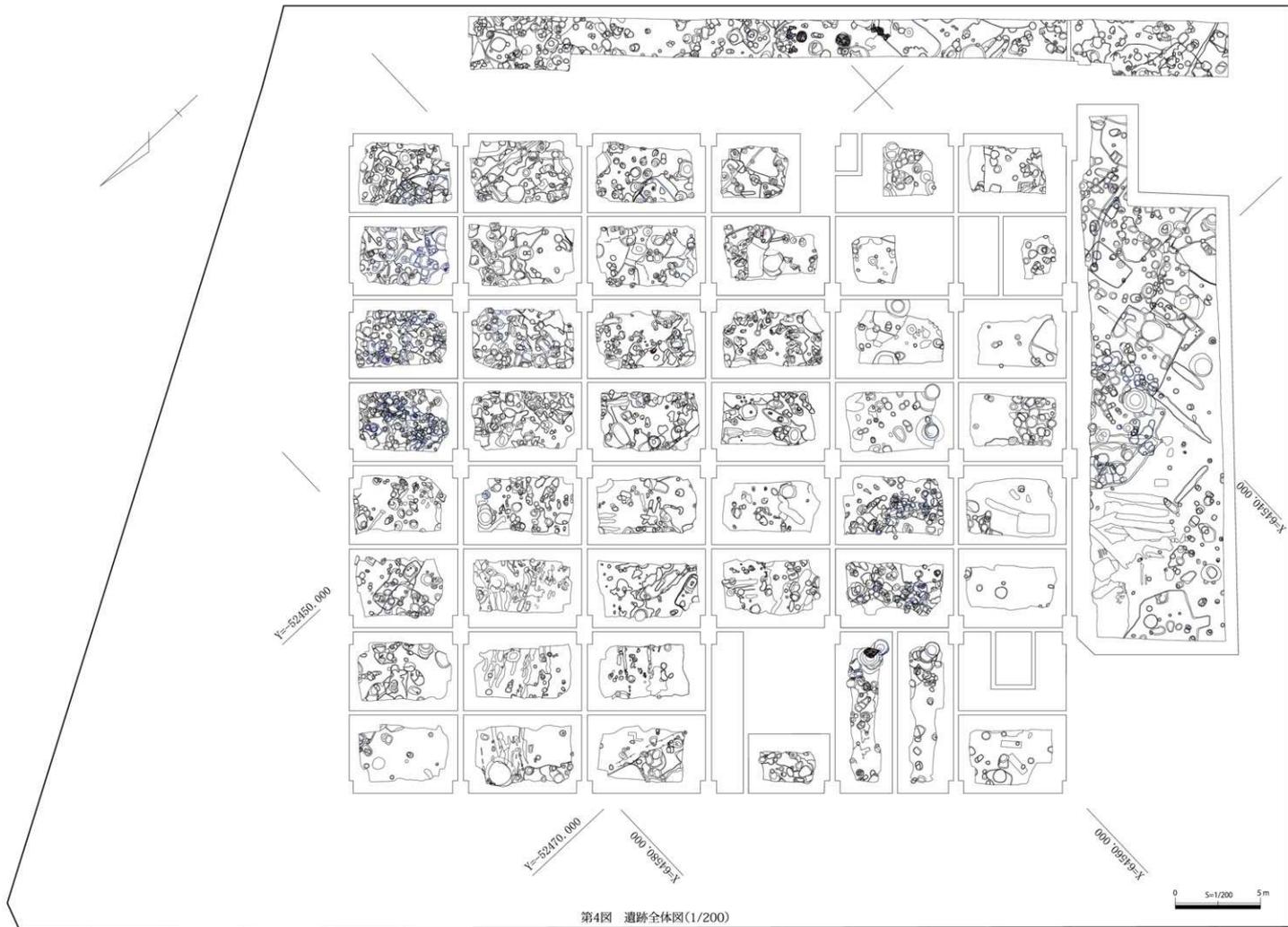
調査地は以前本社ビルが建てられていた場所であり、昭和20年代の古地図では周辺は水田である。現況の調査地は標高約7mを測り、建物の地中梁が格子状に残る。A～F区は、地中梁から約60cmの厚さで真砂土、青灰色粘質土を含む暗褐色粘質土が梁の埋め土として堆積しており、その下層の鳥栖ローム層上面で遺構面を検出した。西・南区は地表面下約20～40cmに碎石、約40～60cmに旧耕作土、約60～80cmに暗褐色粘質土、約80～110cmに遺物を含む暗褐色粘質土が堆積し、その下層の鳥栖ローム層上面で遺構面を検出した。調査区の呼称は上述のとおりであり、報告上では、遺構は区割りに関係なく、遺構ごとに新たに番号を付与して記述する。



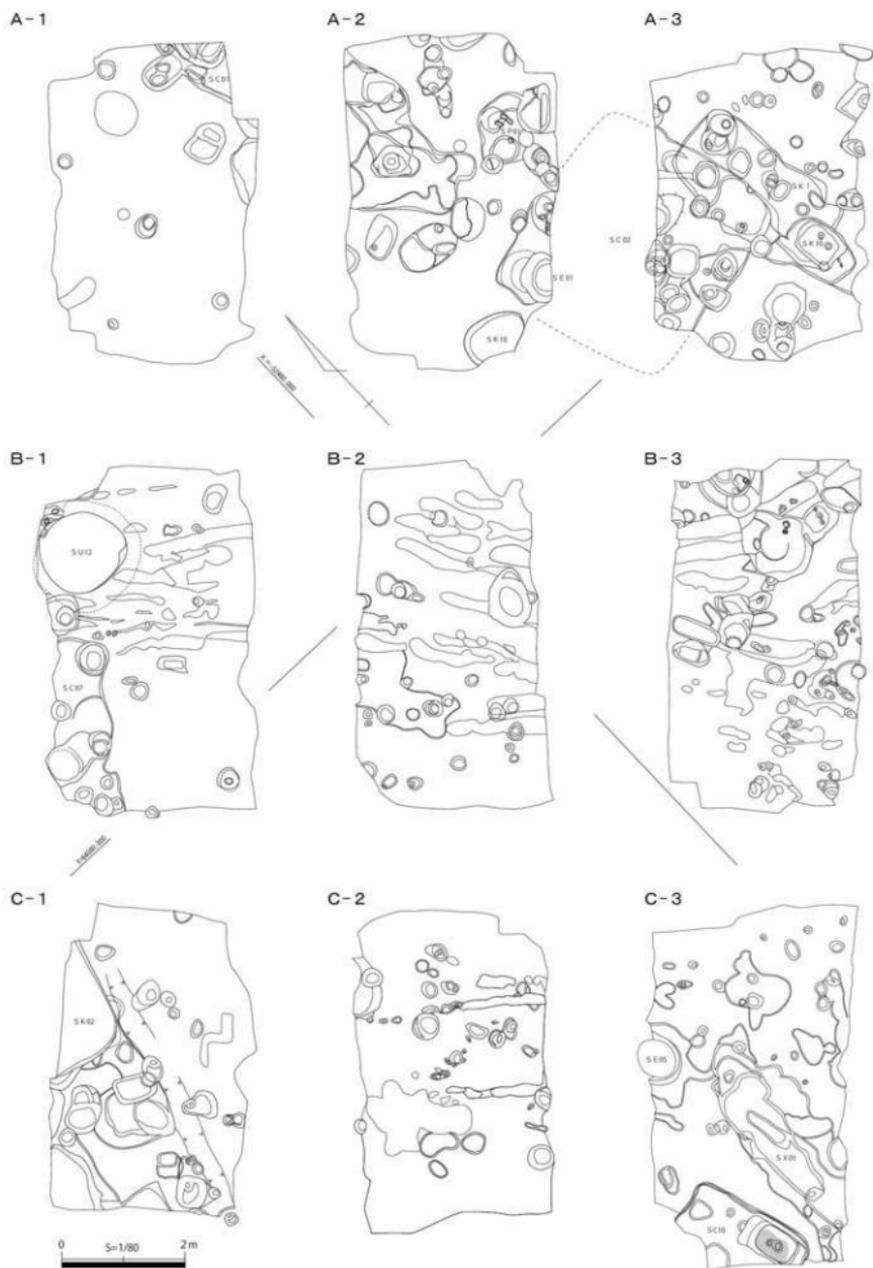
第2图 調査区位置图 (1/4,000)



第3图 山王遺跡第13次調査区範囲图 (1/1,000)

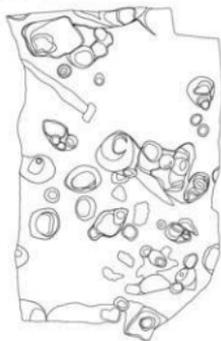


第4図 遺跡全体図(1/200)

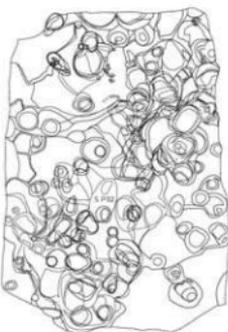


第5图 遺構範囲図A～C区1～3列(1/80)

A-4



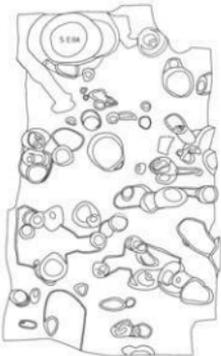
A-5



A-6



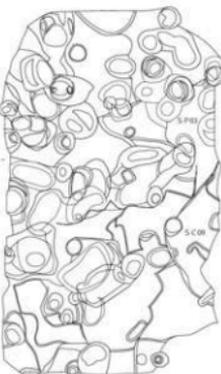
B-4



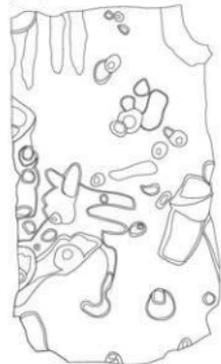
B-5



B-6



C-4



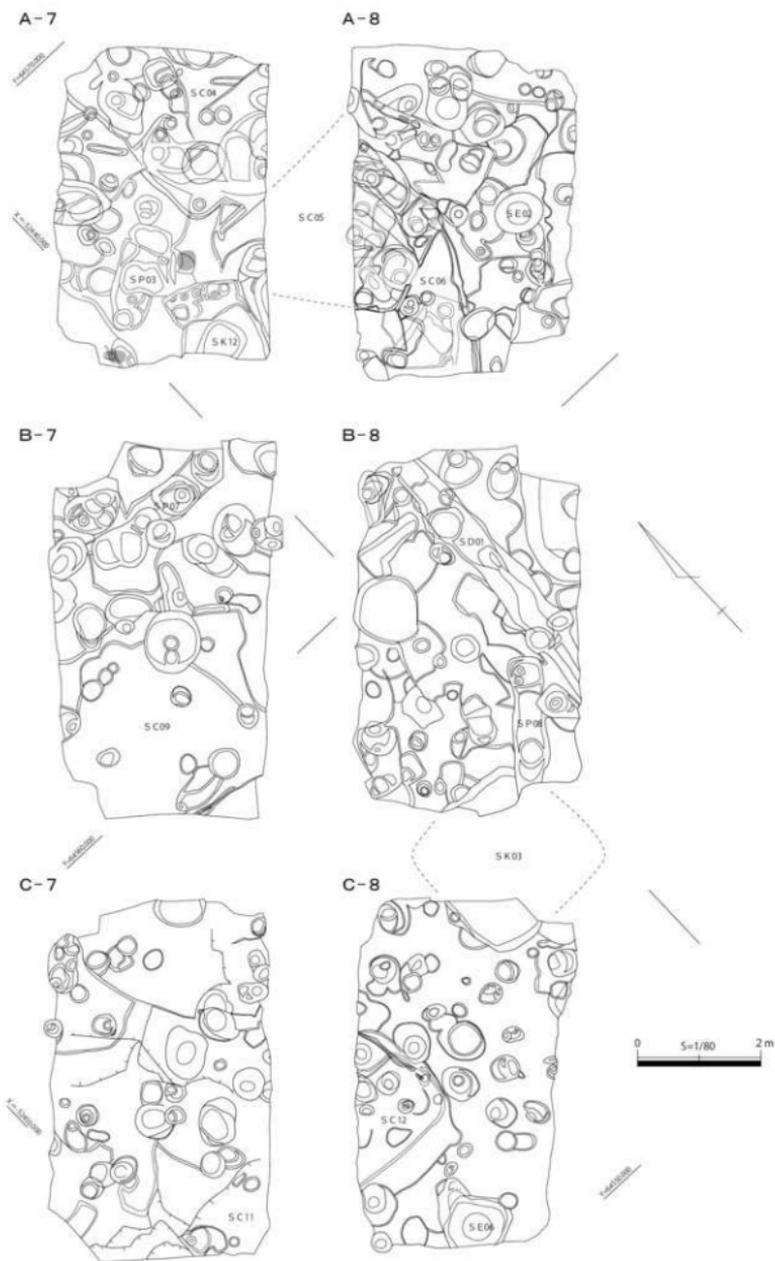
C-5



C-6



第6图 遺構範圍圖A~C区4~6列(1/80)



第7図 遺構範囲図A～C区7～8列(1/80)

D-1

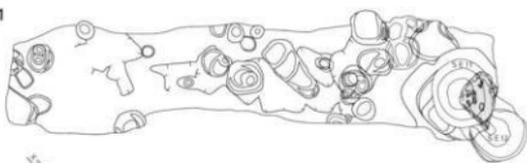


0 5=1/80 2m

D-3



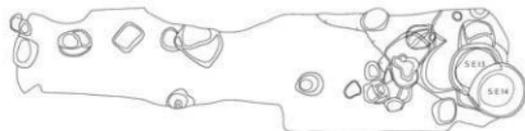
E-1



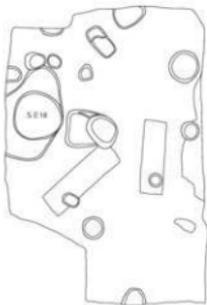
E-3



E-2



F-1

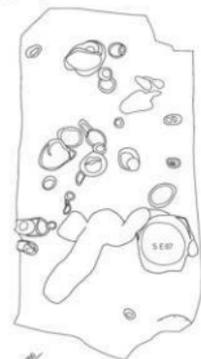


F-3

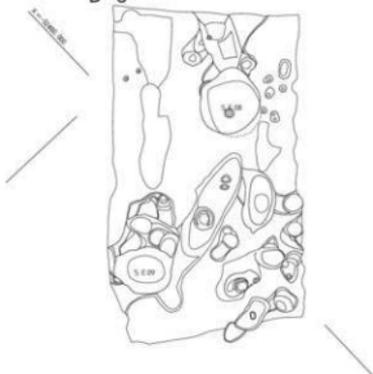


第8図 遺構範囲図D～F区1～3列(1/80)

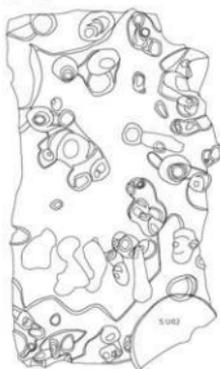
D-4



D-5



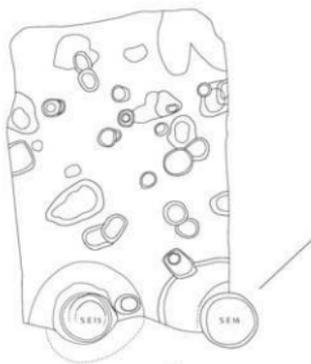
D-6



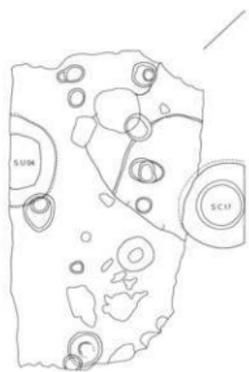
E-4



E-5



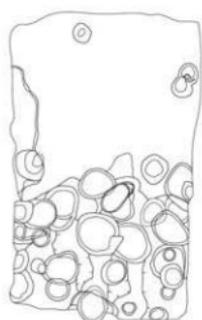
E-6



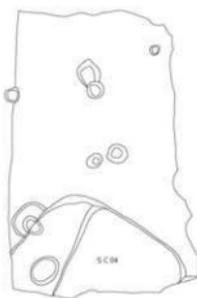
F-4



F-5

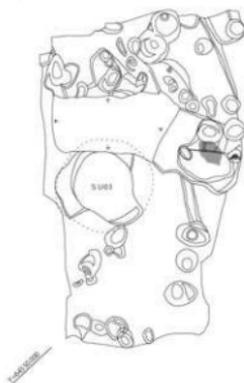


F-6



第9图 遺構範囲図D～F区4～6列(1/80)

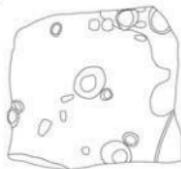
D-7



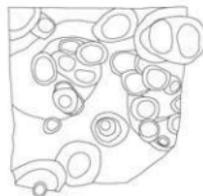
D-8



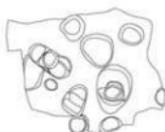
E-7



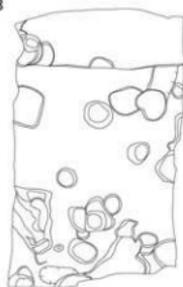
E-8



F-7



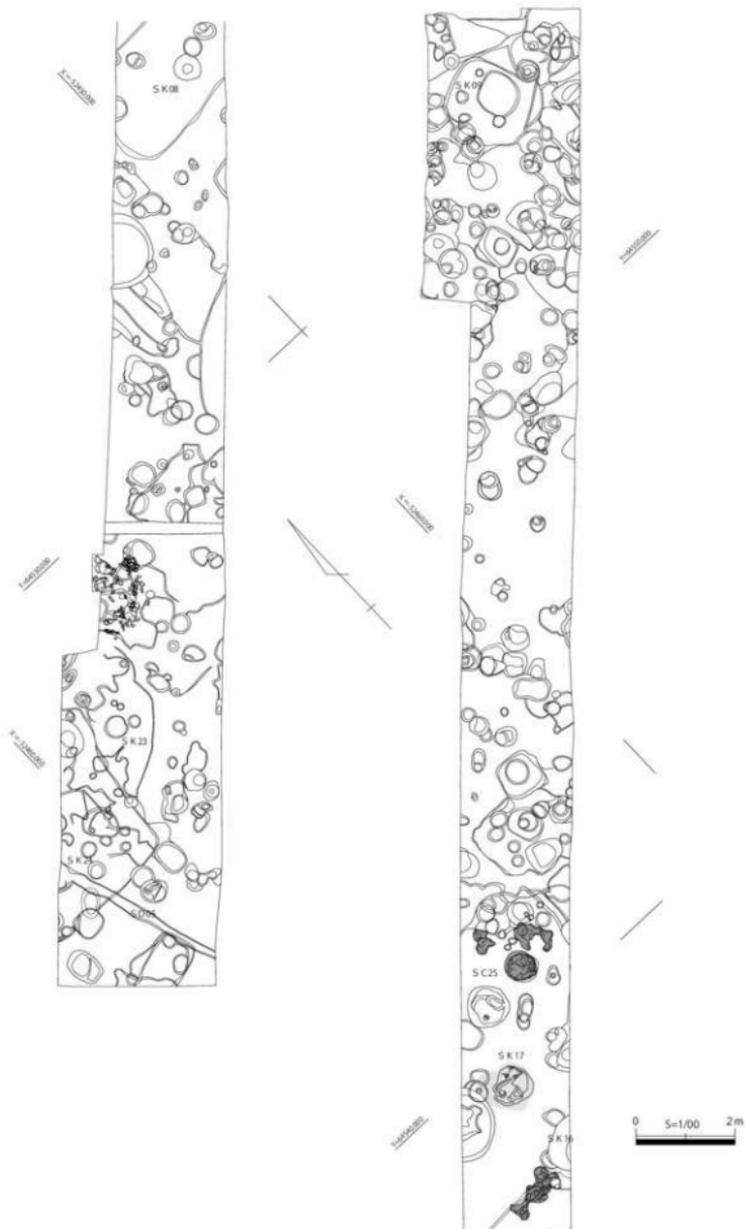
F-8



第10图 遺構範圍圖D~F区7~8列 (1/80)



第11图 遺構範圍图 西区 (1/100)



第12図 遺構範囲図南区(1/100)

### 3. 遺構と遺物

#### (1)住居

竪穴住居は24軒検出した。時期は弥生時代中期後半から後期前半を中心とする。

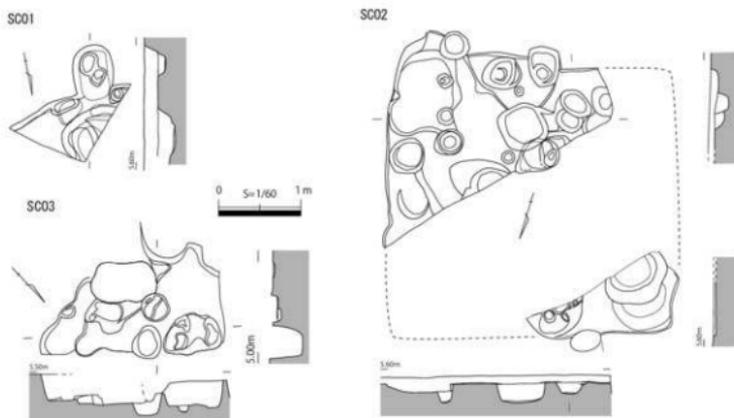
**SC01** A-1区北東側で検出した。床面を幅1.6m程残し、深さは約20cm。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SC02** A-2区南東側からA-3区西側にかけて検出した。平面形は方形で、方位は北から20°西偏する。平坦な床面を幅3.4m程残し、深さは約17cm。壁溝は無く、支柱痕は明確にできない。遺物は弥生土器の小片が出土した。

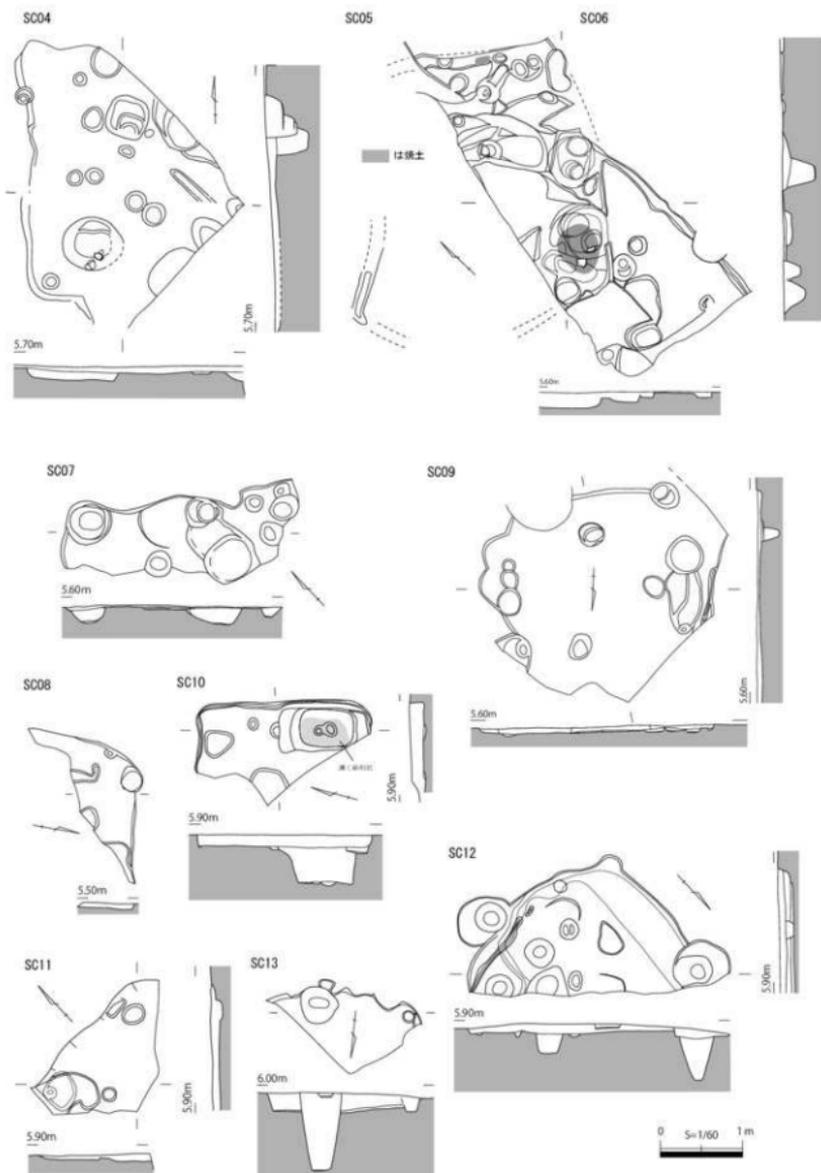
**SC03** A-6区北側で検出した。床面を幅2.2m程残し、深さは約30cm。壁溝は無く、支柱痕は明確にできない。出土遺物から、時期は弥生時代終末期から古墳時代前期前半。遺物1は「鋤先」口縁の丹塗高坏。復元口径30.0cm。口縁端部に刻み目をもつ。2は近畿系の甕。3は石包丁。凝灰岩製で、残存長3.2cm、幅4.4cm、厚さ0.5cm。孔は直径0.5cmで、両側穿孔。4は管玉。長さ1.3cm。直径0.3cm。直径1.5mmの穿孔をもつ。

**SC04** A-7区北側で検出した。床面を幅約3.2m残し、深さ約5cm。平面形は方形。方位は北にとる。壁溝は無く、支柱痕は明確にできない。遺物5は樽形の無頸壺。6は丸底の壺。内面底部に明瞭なケズリが見られる。7は甕。復元底径8.6cm。8は鉢。口径12.1cm、器高6.2cm、底径8.3cm、最大厚1.9cm。器壁は厚く、強いナデの痕跡が内面全体に残る。底部と胴部の境には粘土の継ぎ目が見られる。

**SC05** A-7区南東側からA-8区北西側にかけて検出した。中央部分は攪乱に切られる。平面形はやや四辺形に歪んだ長方形で、床面は長軸約3.3m、短軸約3.0m。幅15cm程の壁溝がめぐる。支柱痕は明確にできない。南東角に径50cm、北東側の壁溝上に15×10cmの範囲で焼土を検出した。遺物は弥生土器の小片が出土した。

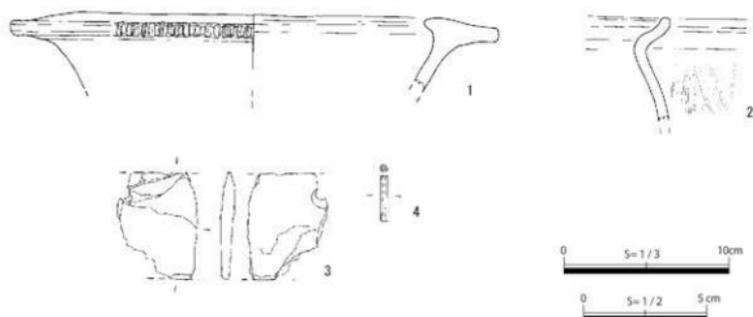


第13図 SC01～03実測図(1/60)

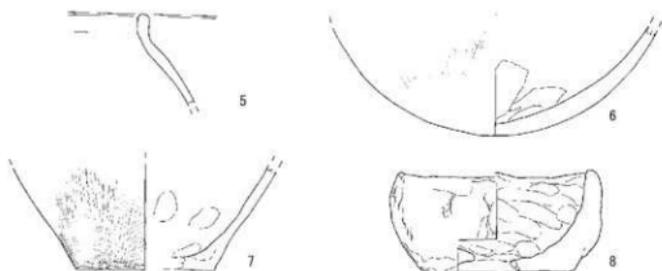


第 14 図 SC04 ~ 13 実測図 (1/60)

SC03



SC04



SC10



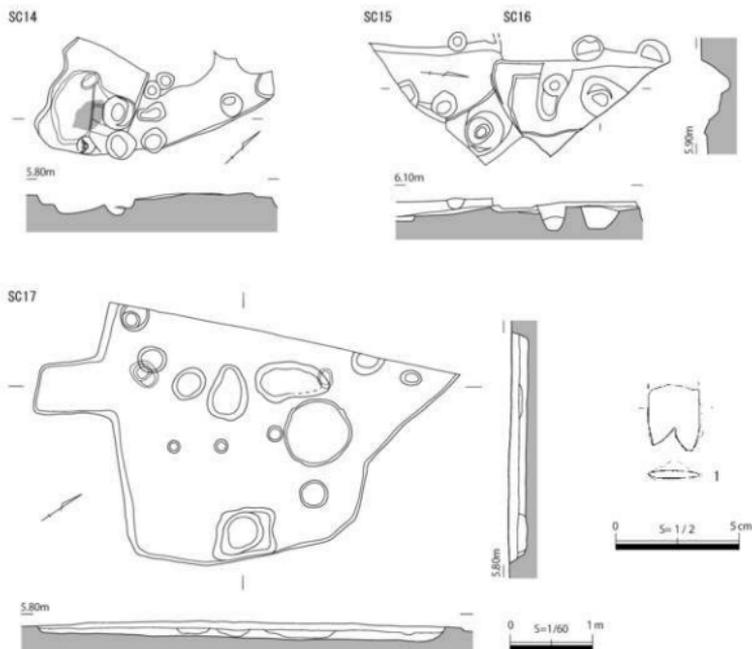
第15図 SC03・04・10出土遺物実測図(1/3)

**SC06** A-8区南西側で、SC08に切られて検出した。側壁が緩やかな弧を描いており、平面形は円形と考えられる。床面を幅約2.4m残し、深さ約7cm。幅10～15cm程の壁溝がめぐる。支柱痕は明確にできない。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SC07** B-1区南西端で検出した。平面形は方形。平坦な床面を幅約2.9m残し、深さ約4cm。壁溝は無い。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SC08** B-6区南端で検出した。平面形は方形で、方位はほぼ真北をとる。床面を幅約1.5m残し、深さ約18cm。壁溝は無く、支柱痕は確認できない。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SC09** B-7区南側で検出した。ややいびつだが、西側に残存する直線的な壁溝から平面形は方形か。方位はほぼ真北をとる。1辺は約3.2mを測り、深さ約5cm。南側に幅約8cmの細い壁溝が遺存する。



第 16 図 SC14～17 実測図 (1/60) SC17 遺物実測図 (1/2)

遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SC10** C-3区南側で検出した。1辺約2.1m、深さ約16cm。幅10cm前後の細い溝がめぐる。平面形は方形で、方位は北から15°西偏する。遺物から、時期は弥生時代中期前半以降。南東壁際の床面から、SK03に方角を描えた方形土壇を検出した。この土壇の床面では薄い砂利状の層を検出した。土壇内からは遺物が出土しており、遺物9は広口壺の口縁部。口唇は断面三角形を呈す。4は壺の胴部。上部には線刻が残り、横方向にめぐる2重線から下部を細かくミガキ調整する。

**SC11** C-7区南端で検出した。わずかに壁と床面が残るのみである。床面を幅約2.0m残し、深さ約8cm。壁溝は無く、支柱痕は確認できない。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SC12** C-8区西側で検出した。平面形は円形もしくは隅丸方形か。床面を幅約2.8m残し、深さ約11cm。北壁沿いに10cm程度間隔をあげ、幅8cm程の壁溝が残る。支柱痕は明確にできない。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SC13** D-3区北端で検出した。床面を幅約1.9m残し、深さ約18cm。壁溝は見られず、支柱痕は確認できない。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SC14** D-7区南東側で検出した。平坦な床面を幅約2.9m残し、深さ約11cm。壁溝は見られず、支柱痕は明確にできない。南側の壁近くに約50cm×30cmの範囲で焼土が見られる。遺物は弥生

土器の小片が出土した。

**SC15** D-8区北東側で検出した。SC19に切られる。直線的な側壁から平面形は方形か。床面を幅約1.5m残し、深さ約15cm。壁溝は見られず、支柱痕は明確にできない。遺物は弥生土器片が出土した。

**SC16** D-8区北東側で検出した。SC18に隣接する。平面形は四辺形に近い方形か。床面を幅約2.2m程残し、深さ約20cm。壁溝はみられず、支柱痕は明確にできない。遺物は弥生土器片が出土した。

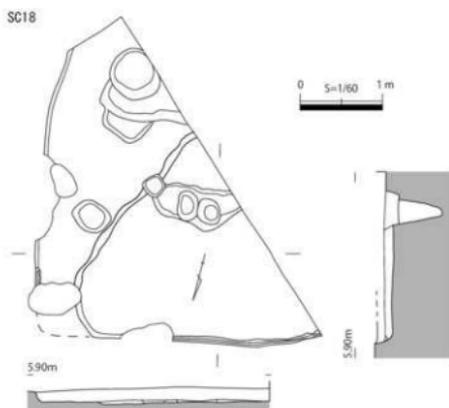
**SC17** 西区西端で検出した。不整形な方形プランで、方位は北から25°東偏する。一辺約3.0m、深さ約20cm。南側に長辺90cm×短辺70cm程の突出部がある。焼土や炭層は検出されなかったものの、土器片が集中する箇所があることから、カマド跡か。壁溝はみられず、支柱痕は明確にできない。遺物から、時期は中期後半以降。遺物は甕片と鉄鏃が出土した。1は無茎三角形の鉄鏃。残存長4.0cm、最大幅2.6cm、最大厚0.3cm。

**SC18** 西区南側で検出した。平面形は方形で、方位は北から12°西偏する。床面を幅約3.3m残し、深さ約10cm。北壁と東壁の一部に幅約8cmの壁溝がめぐる。支柱痕は明確にできない。遺物は弥生土器片が出土した。

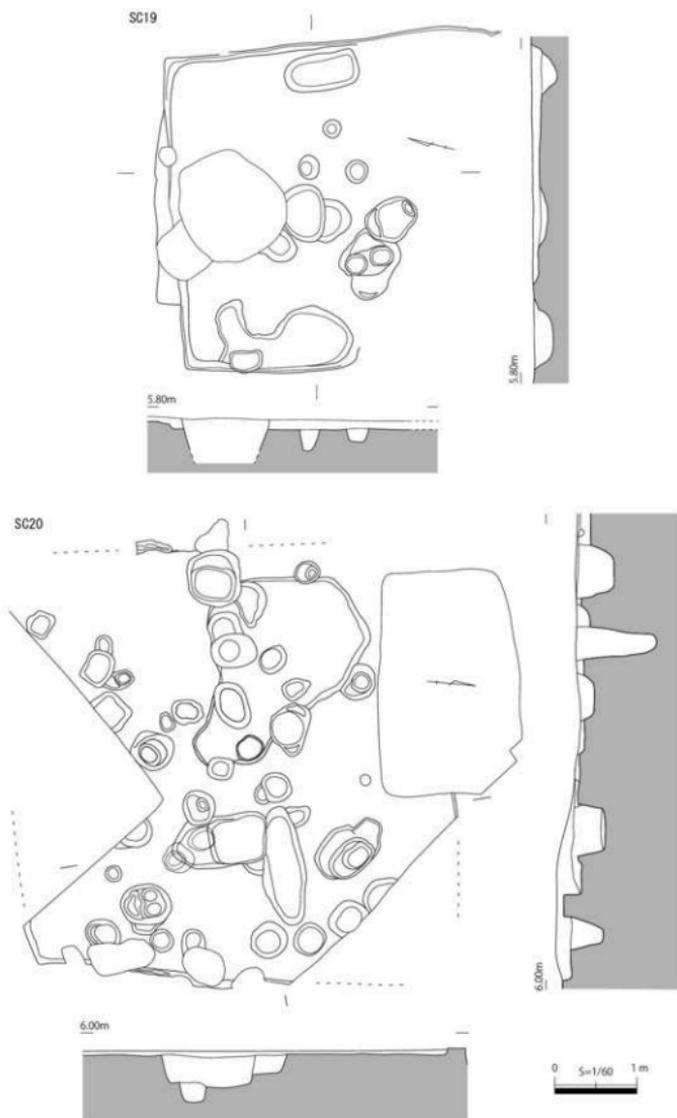
**SC19** 西区中央で検出した。平面形は方形で、方位は北から22°西偏する。1辺は約4.0m、深さ約18cm。壁溝は無く、支柱痕は明確にできない。遺物1は鋤先口縁壺の口縁部。口縁上面には放射状に沈線が施される。2は鉢。3は支脚。復元口径12.0cm、器高18.5cm、底径14.0cm。4・5は台石。4は残存長25.6cm、残存幅18.8cm、最大厚6.8cmを測る。平坦面、側面に細かな敲打痕をもつ。5は残存長11.6cm、幅8.8cm、最大厚2.0cmを測る。

**SC20** 西区南東側で検出した。南東側は調査区外に延びる。平面形は方形で、方位をほぼ真北にとる。1辺約5.4m、深さ約3cm。東西壁に幅約9cmの側溝の痕跡がある。支柱痕は明確にできない。遺物は弥生土器片が出土しており、時期は中期後半。

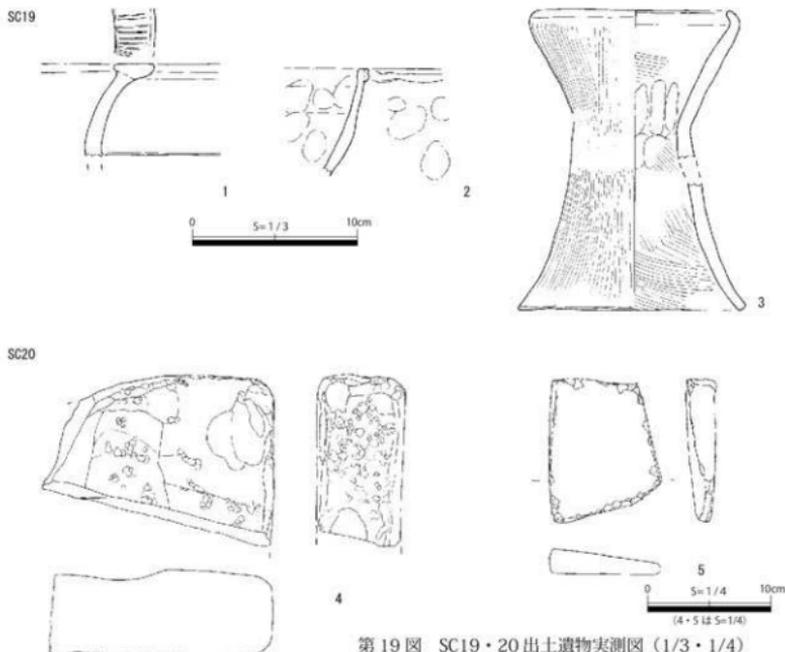
**SC21** 西区南東端で検出した。東側をSC22に切られる。平面形は円形で、床面を約2.5m残し、深さ約15cm。壁溝は無く、支柱痕は明確にできない。遺物は弥生土器の小片が出土した。



第17図 SC18実測図(1/60)



第 18 図 SC19・20 実測図 (1/60)



第19図 SC19・20出土遺物実測図(1/3・1/4)

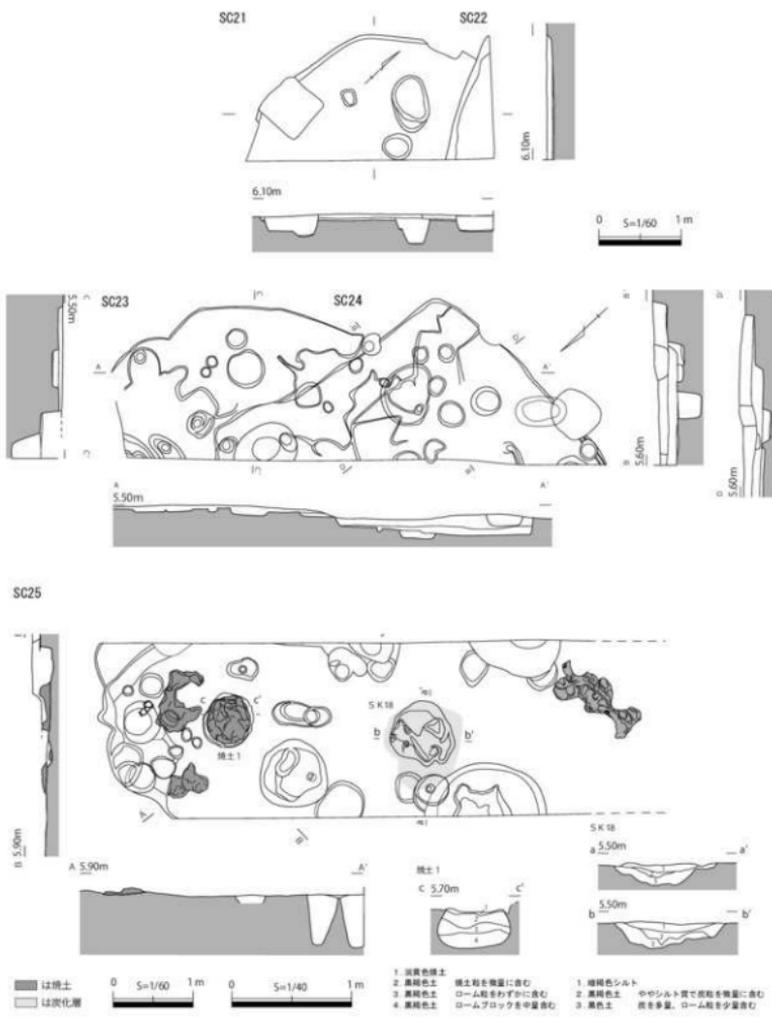
**SC22** 西区南東端で検出した。SC21を切る。検出したのはごく一部であり、平面形は不明。平坦な床面1.5mを検出した。深さ約20cm。壁溝は無く、主柱痕は確認できない。遺物から、時期は中期後半頃。遺物1は甕。復元口径29.7cm。2は石包丁の未製品。ホルンフェルス製か。残存長6.7cm、最大厚0.3cm。磨滅により判断しがたいが、破面に穿孔のような弧を描く稜線が確認される。破面の剥離痕から、石包丁製作時に破損後、破面を調整し製作当初とは異なる形状に成形しようとした痕跡がみられる。

**SC23** 南区南西で検出した。SC23に切られる。平面形は円形で、床面を約1.9m残し、深さ約5cm。南西端に幅約10cmの壁溝がわずかに残る。主柱痕は明確にできない。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SC24** 南区南西で検出した。平面形は方形で、方位はほぼ真北にとる。1辺3.4m、深さ約20cm。南壁の一部に幅約8cmの壁溝が残る。主柱痕は明確にできない。出土遺物から時期は中期後半頃。遺物3は鋤先口縁壺。復元口径22.0cm。口唇端部は面取りし刻目を施す。内外面をミガキ調整する。4は壺。5～7は口縁「逆L字」の甕。5は復元口径24.0cm。6は復元口径28.5cm。7は甕底部。底径6.3cm、底厚2.4cm。底部は厚い上げ底を呈す。6は支脚。復元口径7.0cm。

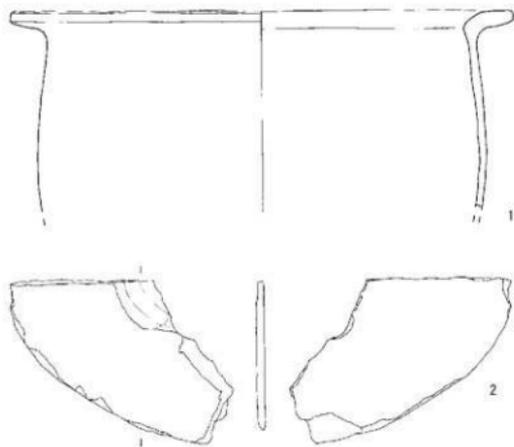
**SC25** 南区中央で検出した。遺存する側壁から平面形は方形。周辺には焼土を含む埋土が広がり、高温で被熱した焼土4か所、埋土に炭層とシルト層をもつ土坑を検出しており、住居に関連する一連の遺構として図示した。壁溝は無く、主柱痕は明確にできない。出土遺物から、時期は弥生時代後

期前半。9は砥石。SC25 上層で出土した。残存長 2.4cm、幅 2.4cm、最大厚 0.3cm を測る。両面の中央部分はゆるやかに磨滅する。10は棒状鉄製品。上部は欠損しており、断面は方形。残存長 4.0cm、幅 0.9cm、厚さ 0.4cm。下端は尖り、錐状の工具の可能性も考えられる。

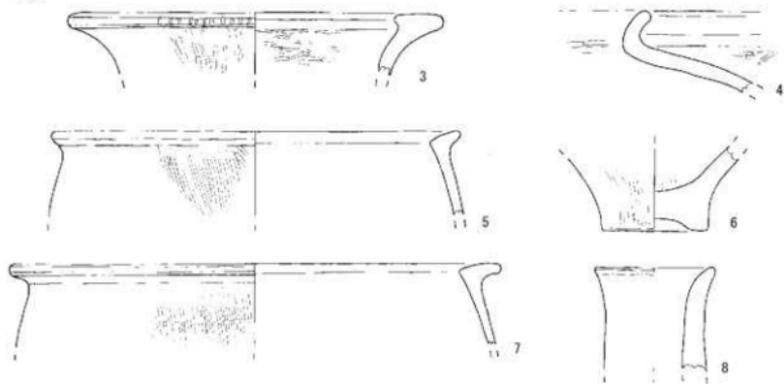


第 20 図 SC21 ~ 25 実測図・SC25 内土坑断面図 (1/60・1/40)

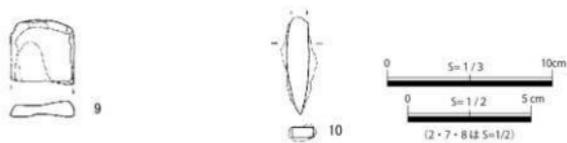
SC22



SC24



SC25



第21图 SC22・24・25 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

## (2)井戸

25 基を検出した。時期は弥生時代中期後半から後期前半と、12 世紀頃を主体とする。

**SE01** A-2 区南側で検出した。平面は直径約 80cm の円形で、深さ約 120cm。遺物から、廃絶時期は弥生時代後期。

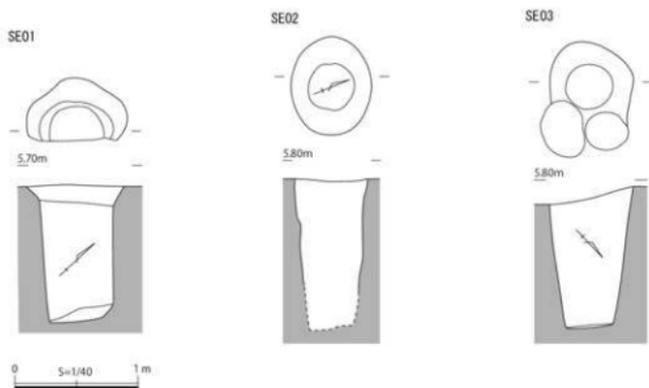
**SE02** A-8 区北側で検出した。平面は長軸 80cm、短軸 66cm の楕円形で、深さ約 130cm。遺物から、廃絶時期は弥生時代後期。

**SE03** A-8 区中央南側で検出した。2 基のピットに切られており、2/3 程度残存する。平面は直径約 70cm の円形で、深さ約 110cm。遺物から、廃絶時期は弥生時代後期。

**SE04** B-4 区北側で検出した。平面は長軸約 150cm の楕円形で、深さ約 190cm。遺物から、廃絶時期は 11 世紀後半～12 世紀前半頃。出土遺物 1 は土師器の口縁。2 は須恵器の甕の体部片で、胴部の復元最大径 8.8cm。胴部最大径付近に、幅 0.7cm の刺突文を施す。刺突文上に復元径 1.5cm の孔をもつ。3 は土師器の小皿である。復元口径 9.0cm、器高 1.1cm、底径 7.6cm。4 は土師皿。復元口径 11.4cm。5 は瓦器椀。底径 6.0cm。6 は白磁碗。復元口径 10.4cm。7 は白磁碗Ⅱ類。復元口径 16.4cm。8 は白磁碗Ⅴ類。復元口径 11.0cm 器高 4.5cm、底径 4.0cm。

**SE05** C-3 区西側で検出した。直径約 85cm の円形で、深さ約 230cm。遺物から、廃絶時期は 12 世紀前半頃。1 は須恵器の環蓋のつまみ部。2～5 は瓦器椀。2 は底部片で復元底径 7.6cm。3 は底部から体部片で復元底径 7.0cm。内外面にヘラ磨きが残る。4 は口径 16.8cm、器高 5.5cm、底径 7.2cm。内外面にヘラ磨きを施す。5 は白磁碗Ⅴ類の底部片。底径 6.2cm。6 は復元口径 16.6cm、器高 5.7cm、底径 6.2cm。内外面にヘラ磨きを施す。7 は磨製石剣の剣身。残存長 2.7cm、幅 2.2cm、最大厚 0.5cm。断面系はやや片面が緩やかな両鎚造を呈す。

**SE06** C-8 区南側で検出した。長軸約 110cm の略方形で、深さ約 230cm。出土遺物は弥生土器を主とするが、ごくわずかに須恵器の小片が出土しており、廃絶時期は 6 世紀末～7 世紀初頭以降か。SE06 が切るピットからⅣ期の須恵器が出土しており、土器は全て底面付近から出土した。1・2 は壺。1 は胴部最大径 26.7cm、底径 8.3cm。胴部下半に 2 か所の焼成後穿孔があり、上部の孔は直径 0.7cm、



第 22 図 SE01～03 実測図 (1/40)

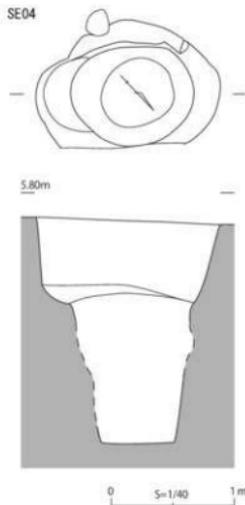
下部の孔は直径1.4cm。2は井戸底部付近から出土した。頸部径10.9cm、胴部最大径22.1cm、底径8.1cm。頸部下部に断面三角形の突帯が1条めぐる。胴部中央に直径約19.5cmの人為的な打ち欠きがみられる。底部際はずかに丸くレンズ底化の兆候がある。3は甕である。井戸底面より出土した。胴部から底部まで残存しており、胴部最大径23.5cm、底径8.5cmを測る。底部脇はずかにくびれ、際は丸くレンズ底化の兆候がある。4は敲き石。残存長14.4cm、最大幅12.0cmで、半分以上を欠損している。片面は全体に細かな敲打痕が見られる。

**SE07** D-4区南東で検出した。直径約95cmの円形で、深さ約185cm。遺物から、廃絶時期は弥生時代後期。

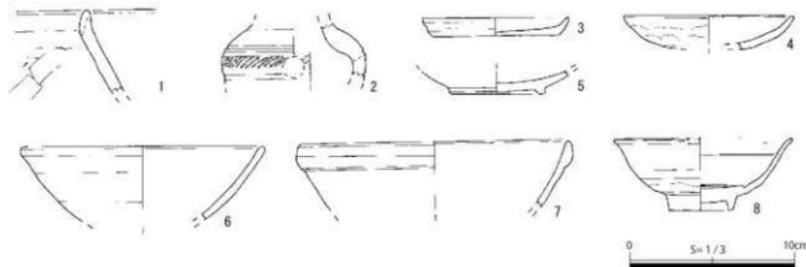
**SE08** D-5区中央からやや北東側で検出した。直径約100cmの円形で、深さ約145cm。底には正位置で関係の甕が出土した。遺物から、廃絶時期は弥生時代後期前半頃。遺物1は下底に埋置された甕。口径15.1cm、器高9.0cm、胴部最大径13.4cm、底径5.0cm。

**SE09** D-5区南西で検出した。長軸約95cm、短軸約75cmの楕円形を呈しており、深さ約185cm。出土遺物から、廃絶時期は後期前半ごろ。遺物2は「く字」口縁の広口短頸壺。口縁から胴部にかけて残存しており、復元口径13.5cm、復元頸部径12cm。3・4は甕の口縁部片。3は外面と内面の頸部下方をハケ、胴部内面をナデ調整する。4は「L字」甕の口縁部。5は瓢型壺の口縁部片。6は甕の胴部片。方形の突帯と断面三角形の突帯が1条ずつめぐる。7は支脚片。8は小型丸底壺。復元口径9.6cm、頸部径7.6cm、胴部最大径8.6cm。内外面をハケ調整する。9は高坏の脚部。復元底径10.2cm。

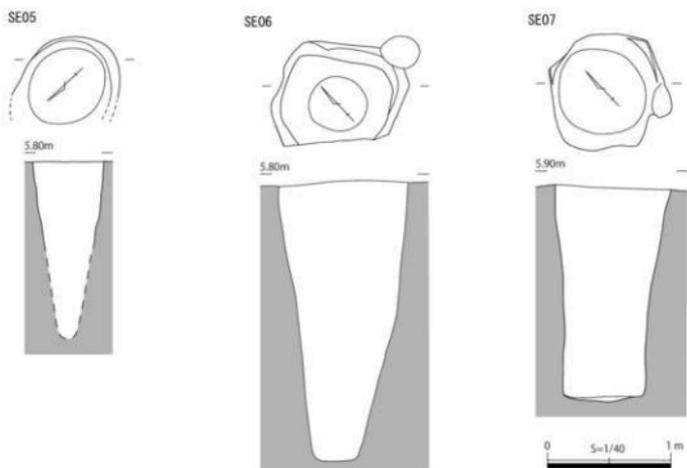
**SE10** D-6区北東で検出した。攪乱に半分以上切られており、直径約70cm、深さ約260cm。出土した8の器台は3の甕に入った状態で出土した。遺物から、廃絶時期は弥生時代中期末から後期前半。遺物1・2は壺。1は広口の丹塗磨研壺。内外面を丹塗し、頸部外面に縦方向の暗文が施される。2は二重口縁壺。口径19.5cm。外面頸部下に断面三角形の突帯が1条めぐる。3～5は甕。3は復元口径36.8cm、復元頸部径33.8cm。口縁下に断面三角形の突帯が1条めぐる。4・5は「く字」



第23図 SE04実測図(1/40)

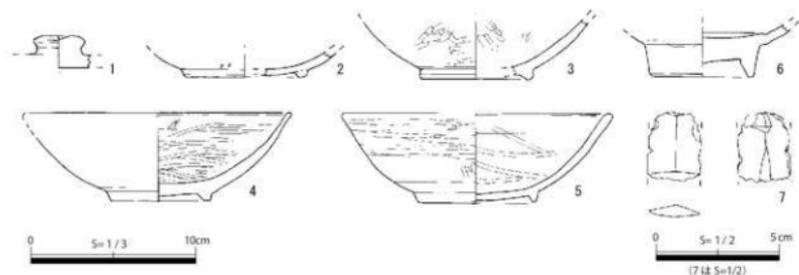


第24図 SE04出土遺物実測図(1/3)

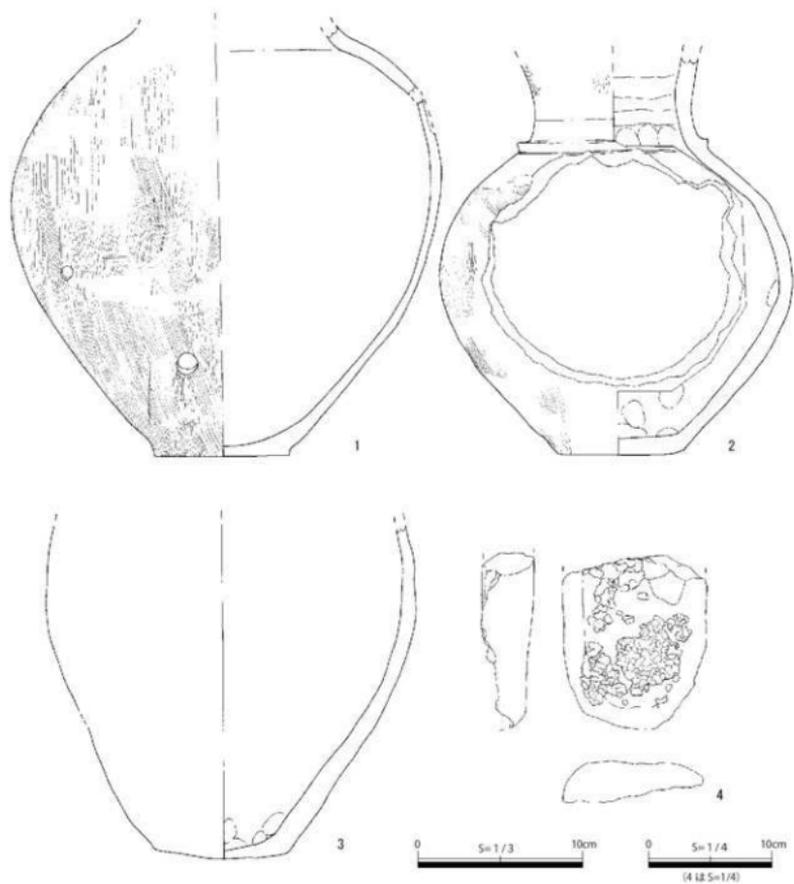


第 25 図 SE05～07 実測図 (1/40)

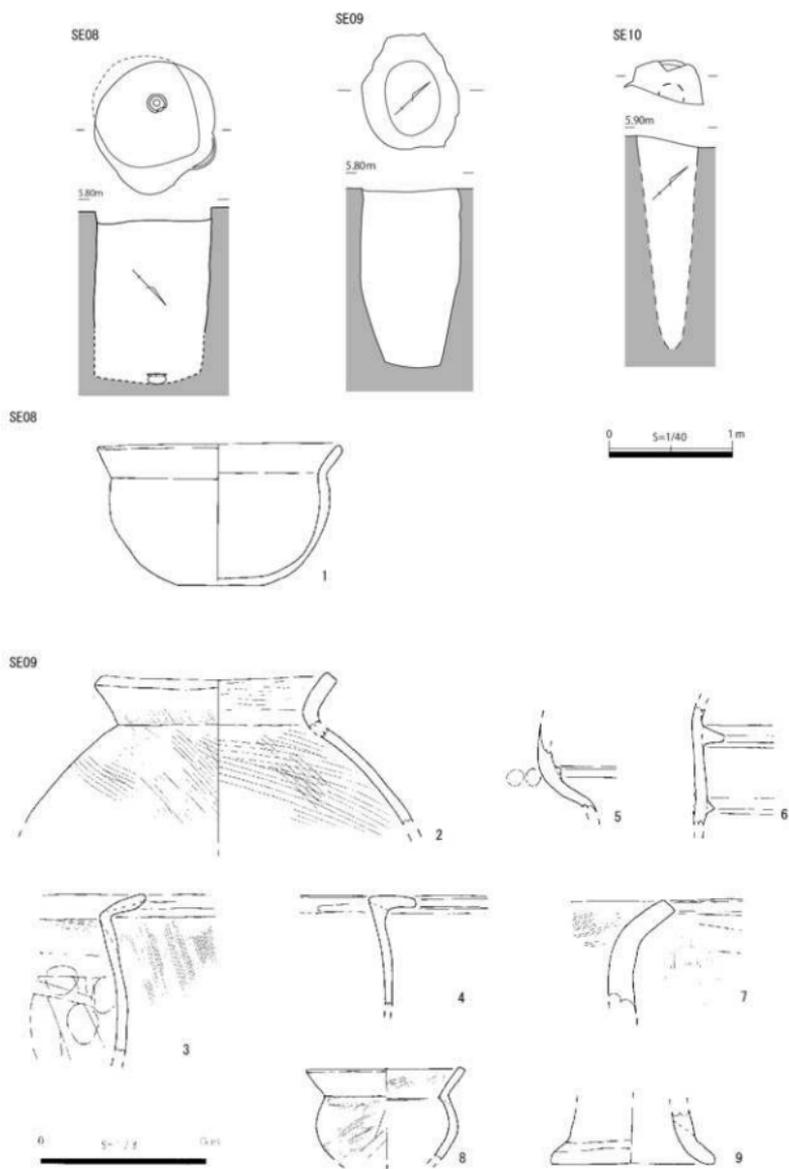
の口縁で、4 は口径 18.0cm、胴部最大径 18.2cm、器高 14.9cm、底径 9.5cm。底部際はやや丸くレンズ底化の兆候がある。5 は口径 18.2cm、胴部最大径 18.5cm、器高 15.1cm、底径 4.0cm。底部の際は丸くレンズ底化の兆候がある。6 は甕、もしくは壺の底部。底径 10.0cm。外面と内面・底部のハケは別の原体で施される。7 は甕の底部。復元底径 7.8cm。底部中央付近には穿孔が施される。8・9 は支脚。8 は復元底径 13.6cm。9 は底径 9.2cm。10 は石製紡錘車。直径 2.2cm、厚さ 0.3cm で、中央に直径 0.6cm の穿孔をもつ。



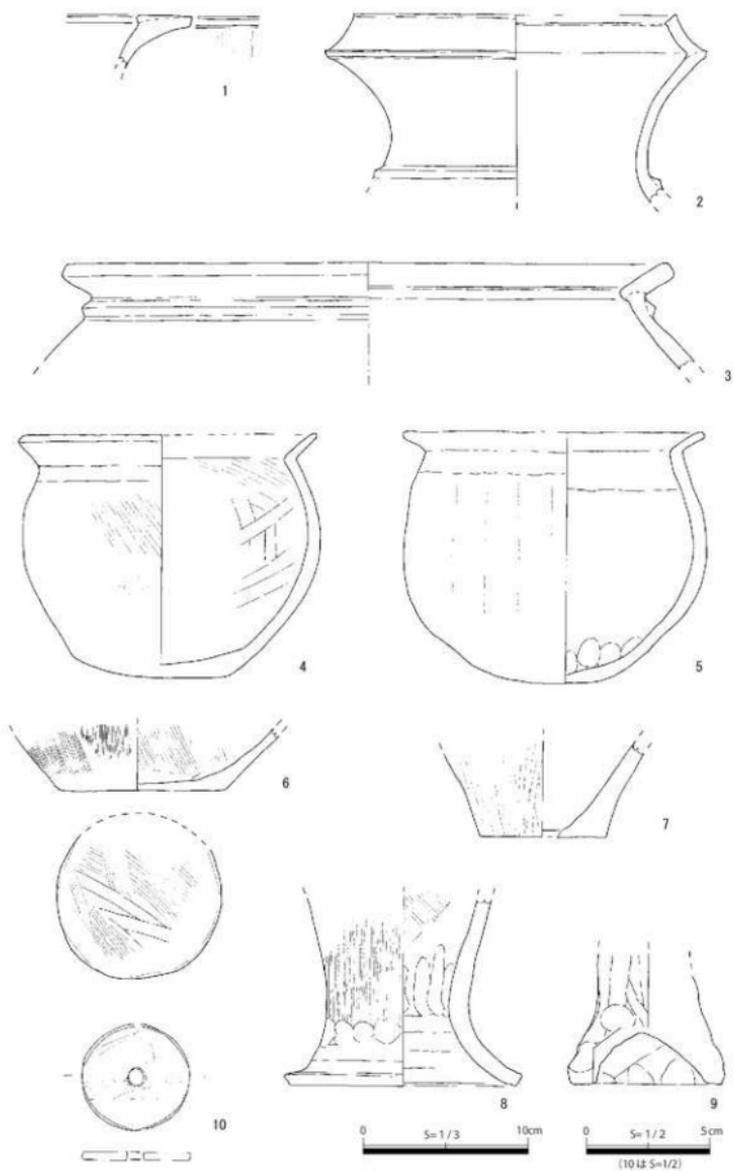
第 26 図 SE05 出土遺物実測図 (1/3)



第 27 图 SE06 出土遺物実測図 (1/3)



第28图 SE08~10 实测图 (1/40)・SE08・09 出土遺物实测图 (1/3)

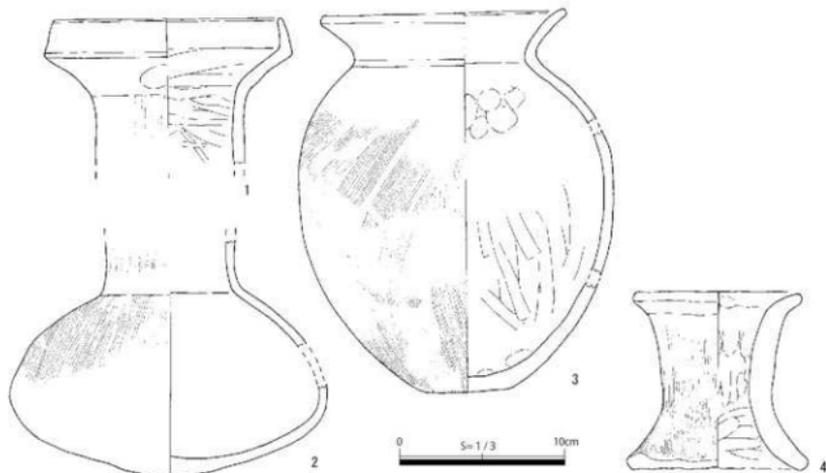
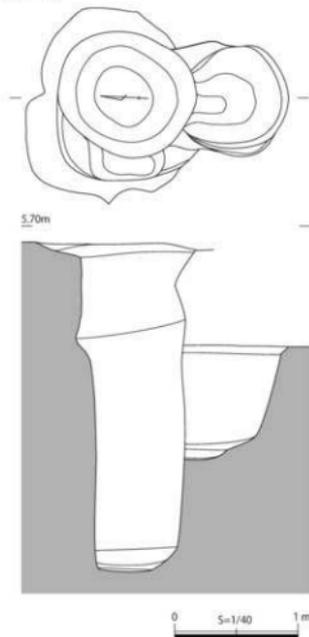


第29図 SE10出土遺物実測図 (1/3・1/2)

**SE11** E-1区東側で検出した。直径約110cmの円形で、深さ約270cm。

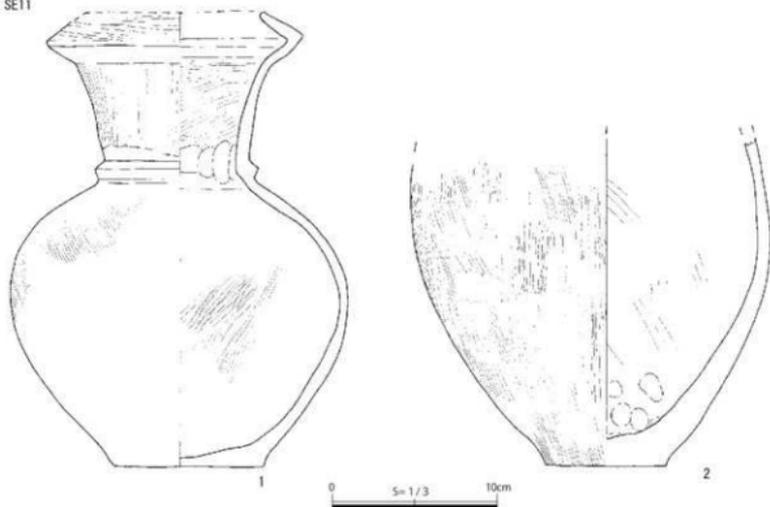
**SE12** E-1区東側でSE11に切られて検出した。直径90cmの円形で、深さ約86cm。遺物1～4はSE11・12を同時に下げた際に検出した。遺物1は複合口縁壺。遺物2は丸底壺。遺物3は近畿系の甕。口径15.1cm、頸部径11.2cm、胴部最大径19.2cm、器高23.4cm、底径5.0cm。1は複合口縁壺。口径140cm、頸部径9.7cm。4は支脚。復元口径10.0cm、器高10.7cm、底径10.4cm。第31図1、2はSE11、3～6はSE12で出土した。1は複合口縁壺。器高10.5cm、胴部最大径19.5cm、底径8.7cmを測る。2は甕。底径7.5cmを測る。3は「逆L字」甕の口縁部。復元口径32.0cm、頸部径28.4cm。4は甕。胴部のみ残存し、口縁部の形状は不明。底径7.3cm。底部際は丸い。5は飯蛸壺。復元口径6.8cmを測り、胴部中心よりやや上に直径約0.8cmの穿孔をもつ。6は丹塗磨研甕、もしくは甕の底部。底径7.4cmで、底部中央には直径約1.6cmの穿孔が施される。穿孔は焼成前に外側から穿たれる。丹塗は外面のみ。SE11・12とも、土器の時期は中期後半から後期前半に集中する。ただしSE11・12を同時に下げた際に畿内系の甕が出土しており、SE11がSE12を切ることから、少なくともSE11の廃絶時期は弥生時代終末期まで下ると考えられる。

SE11・12

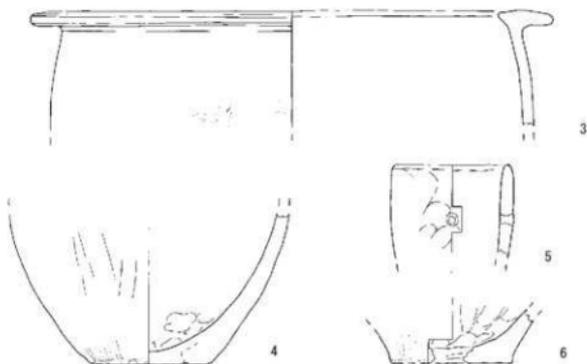


第30図 SE11・12実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

SE11



SE12

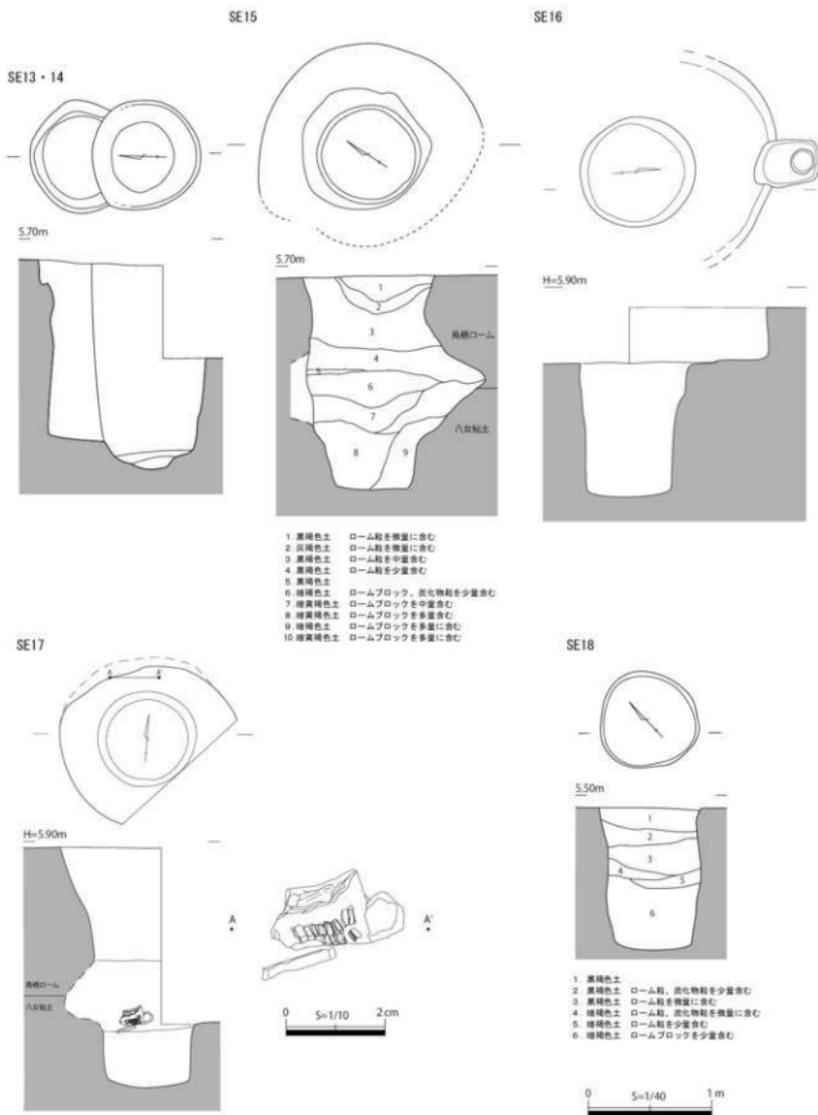


第31図 SE11・12出土遺物実測図(1/3)

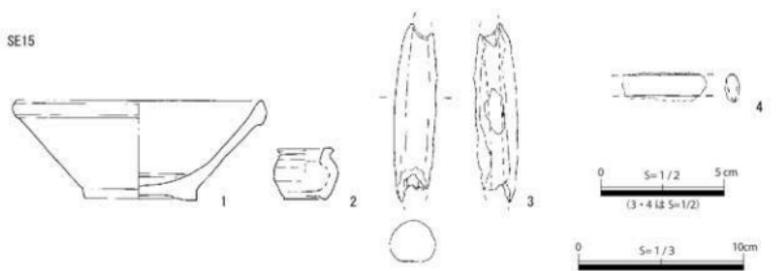
**SE13** E-2区東側でSE14に切られて検出した。直径約95cmの円形で、深さ約160cm。遺物から、廃絶時期は弥生時代後期前半。

**SE14** E-2区東側で検出した。直径約90cmの円形で、検出面からの深さ約160cm。遺物から、廃絶時期は弥生時代後期前半。

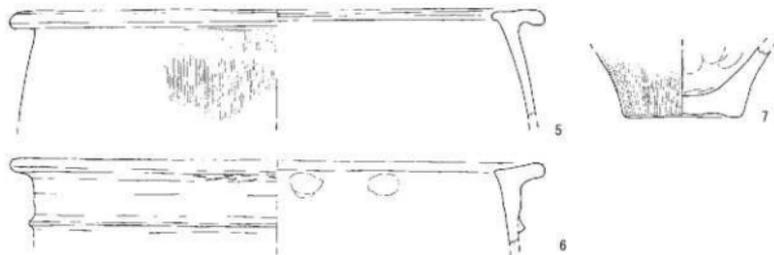
**SE15** E-6区南西側で検出した。直径約105cmの円形で、深さ約180cm。遺物から、廃絶時期は12世紀頃。遺物1は白磁碗Ⅳ類。口径14.4cm、器高5.4cm、高台径6.3cm。2は小壺。口径3.3cm、



第32図 SE13～18実測図(1/40)・SE17出土獣骨実測図(1/10)



SE18

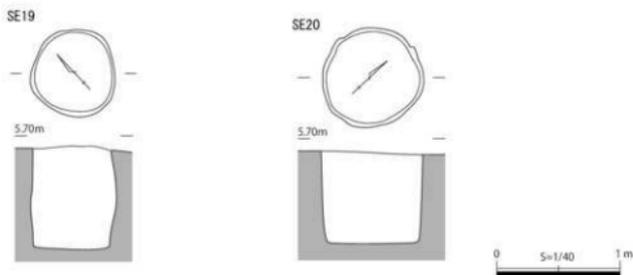


第33図 SE15・SE18 出土遺物 (1/3・1/2)

器高 3.0cm、高台径 2.4cm。3は土鍾。残存長 10.2cm、最大径 2.4cm。4は鉄製品。残存長 4.8cm、幅 1.2cm。最大厚 0.6cm。断面形がやや扁平な三角形を呈すことから、刀子か。

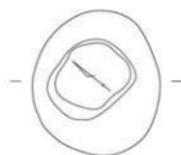
**SE16** E-6区南東側で検出した。直径約 90cm (掘方を除く) の円形で、深さ約 230cm。遺物から、廃絶時期は 12 世紀頃。

**SE17** E-6区東側で検出した。直径約 85cm の円形で、深さ約 190cm。遺物から、廃絶時期は 12 世紀頃。検出面から約 145cm の地点に鳥栖ローム層と八女粘土層の境があり、そのやや下部の壁が抉れた部分から、幼馬、もしくは小型の成馬の頭骨と下顎骨、前腕骨の一部が出土した。馬の頭



第34図 SE19・20 実測図 (1/40)

SE21

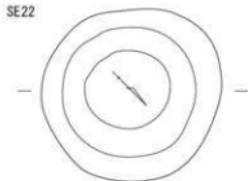


5.80m

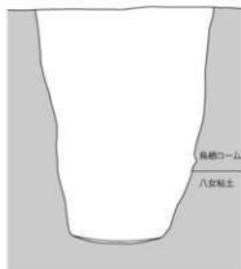


0 5=1/40 1m

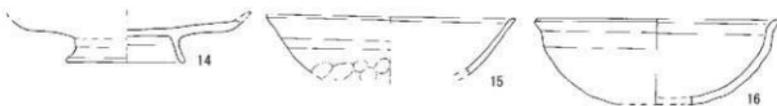
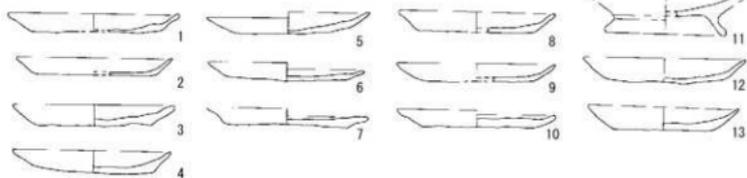
SE22



5.80m



SE21



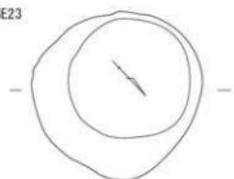
SE22



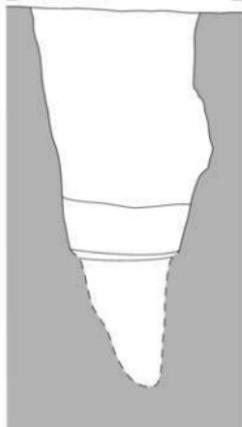
0 5=1/3 10cm

第35図 SE21・22 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

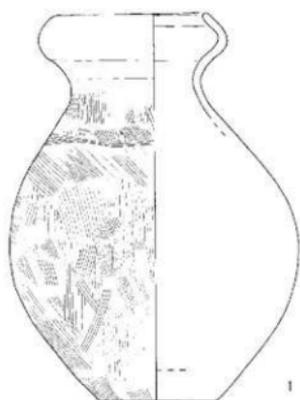
SE23



5.80m



0 5=1/40 1m



1



2



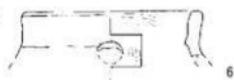
3



4

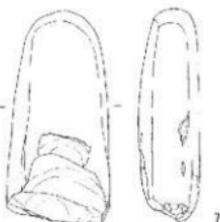


5



6

0 5=1/3 10cm

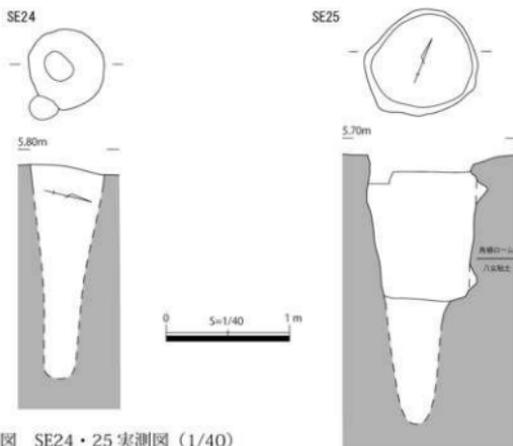


7

0 5=1/4 10cm

(7は5=1/4)

第36図 SE23 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3・1/4)



第 37 図 SE24・25 実測図 (1/40)

部が壁のくぼみに取められている点、頭部と前腕骨の整然とした位置から、この個体は井戸中に投棄されたのではなく、意図的に取められたものと考えられる。調査時は確認できなかったが、本来は井戸内部に全身があったものと考えられる。

**SE18** F-1 区西側で検出した。直径約 80cm の円形で、深さ約 120cm。遺物から、廃絶時期は弥生時代中期後半。遺物 5～7 は甕。5 は「逆 L 字」口縁で、復元口径 31.0cm。胴部上方に断面三角形の突帯が 1 条めぐる。6 は「逆 L 字」口縁で、復元口径 28.0cm。7 は復元底径 7.4cm。外底面は外縁を肥厚させるためやや上げ底状。

**SE19** F-3 区中央やや西側で検出した。直径約 70cm の円形で、深さ 80cm までを調査した。遺物から、廃絶時期は弥生時代後期前半。

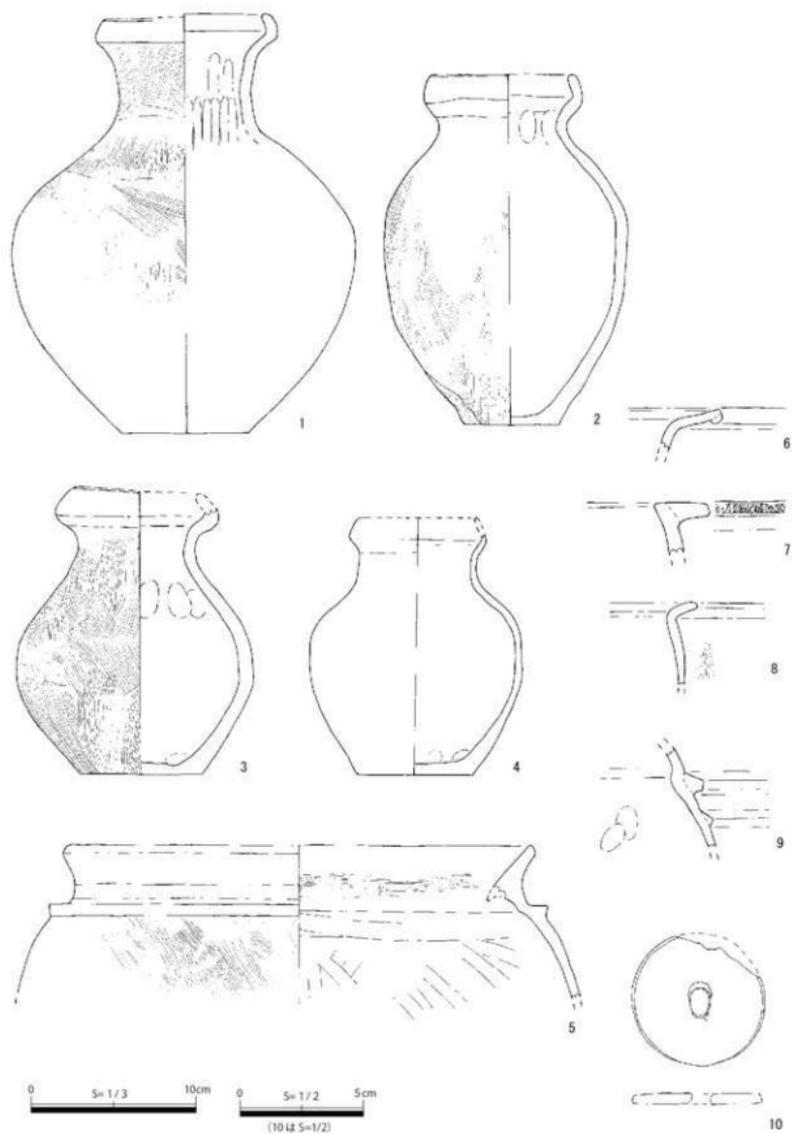
**SE20** 西区西側で検出した。直径約 85cm の円形で、深さ 54cm までを調査した。遺物から、廃絶時期は弥生時代後期前半。

**SE21** 西区南西側で検出した。長軸約 120cm、短軸約 100cm の楕円形で、深さ約 125cm。鳥栖ローム層と八女粘土層の境を底面とする。遺物から、廃絶時期は 12 世紀後半頃。遺物 1 から 10・12・13 は土師器の皿。いずれも口径 10cm 前後、底径 7.5cm 前後、器高 1.5cm 前後である。11・14 は土師器の鉢。11 は復元底径 7.8cm。14 は復元底径 7.6cm。15、16 は土師器の鉢。15 は復元口径 16.0cm。16 は復元口径 15.6cm、器高 5.5cm、底部は丸底。口縁外面と内面にススが付着する。

**SE22** 西区中央付近で検出した。直径約 145cm の円形で、深さ約 190cm。遺物から、廃絶時期



第 38 図 SE24 出土遺物実測図 (1/3)



第39図 SE25出土遺物実測図(1/3・1/2)

は古墳時代前期前葉。遺物 17 は山陰系二重口縁壺の口縁部片。18 は「逆 L 字」口縁の襷。口縁下部に断面三角形の突帯が 1 条めぐる。

**SE23** 西区中央南側で検出した。直径約 140cm の円形で、深さ約 310cm。遺物から、廃絶時期は弥生時代後期前半。遺物 1・2 は壺。1 は袋状口縁壺。口径 9.6cm、胴部最大径 18.3cm、器高 24.6cm、底径 7.5cm。外面は斜めハケ調整を主体とし、肩部に細い横方向のハケを施す。2 は頸部径 21.0cm。口縁下にゆるやかな断面三角形の突帯が 1 条めぐる。3～5 は襷。3 は「く字」口縁の襷。復元口径 30.0cm。6 は復元口径 27.6cm、口縁下に断面三角形の突帯が 1 条めぐる。5 は底部。復元底径 9.0cm。4 は蛸壺。復元口径 12.0cm、中央部に直径 2.1cm の穿孔をもつ。7 は太型蛤刃石斧。残存長 16.4cm、最大厚 4.6cm。刃部を欠損する。

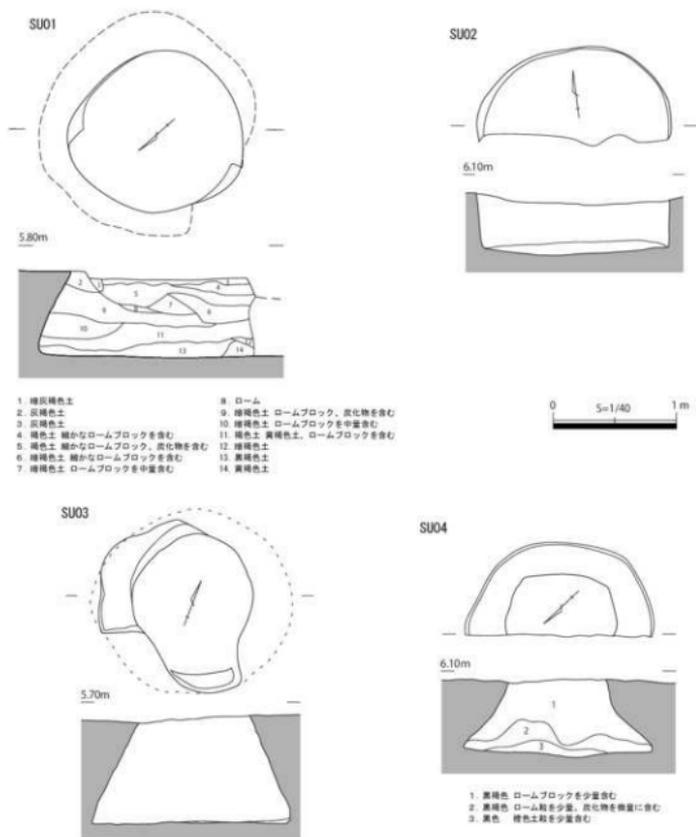
**SE24** 西区中央南東側で検出した。直径約 100cm の円形で、深さ約 100cm。遺物から、廃絶時期は弥生時代中期。遺物 1 は襷。復元口径 27.4cm。

**SE25** 西区中央東側で検出した。直径約 130cm の円形で、深さ約 220cm。遺物から廃絶時期は弥生時代後期前半。遺物 1～4 はほぼ完形の袋状口縁壺。いずれも口縁の稜線化がやや進む。1 は口径 10.5cm、胴部最大径 22.0cm、器高 26.8cm、底径 8.0cm。2 は口径 8.2cm、胴部最大径 15.5cm、器高 22.3cm、底径 6.2cm。1 に比べ成形、調整が粗製。3 は復元口径 8.3cm、胴部最大径 15.1cm、器高 18.3cm、底径 7.8cm。4 は復元口径 7.6cm、胴部最大径 6.6cm、器高 16.4cm。5 は「く字」口縁の襷。復元口径 40.0cm を測る。外面口縁よりやや下に 1 条の断面三角形の突帯が巡る。6 は広口壺の口縁部片。口縁端部にわずかに丹塗が残る。7・8 は襷。7 は口縁部片で、端部は方形で口唇に刻目を施す。8 は「逆 L 字」口縁。9 は瓢形土器の肩部から胴部片。上に断面台形の突帯、下に断面三角形の突帯が 1 条ずつめぐる。外面に丹塗が残る。10 は石製の紡錘車。直径 5.5cm、厚さ 0.3cm を測り、ほぼ中央に長軸 1.3cm、短軸 0.9cm の楕円形を呈す孔をもつ。

### (3)貯蔵穴

4基の貯蔵穴を検出した。時期は弥生時代前期末から後期前半。

**SU01** B-1区北側で検出した。上面の直径約1.4m、深さ57cm、底面の直径約1.8m。平面円形で断面形はフラスコ状。出土遺物から廃絶時期は前期末から中期初頭に位置づけられる。遺物はいずれも下層から底部で出土した。1・2・4・5は甕。1は口唇前面に刻目、胴部上半に沈線をもつ。2は三角口縁で、胴部上半に刻目を持つ断面緩やかな三角形の突帯を施す。3は鉢。復元口径16.7cm、胴部最大径15.2cm。4は底径7.8cm。底部内面に指突圧痕を施す。底部は上げ底で、外底脇は外側に開き大きくくびれる。5は復元底径7.9cm。6は壺。7・8は太型蛤刃石斧。7は残存長18.8cm、幅12.6cm、最大厚5.6cm。上部を欠損する。8は未製品。残存長8.4cm、幅8.4cm、最大厚4.4cm。

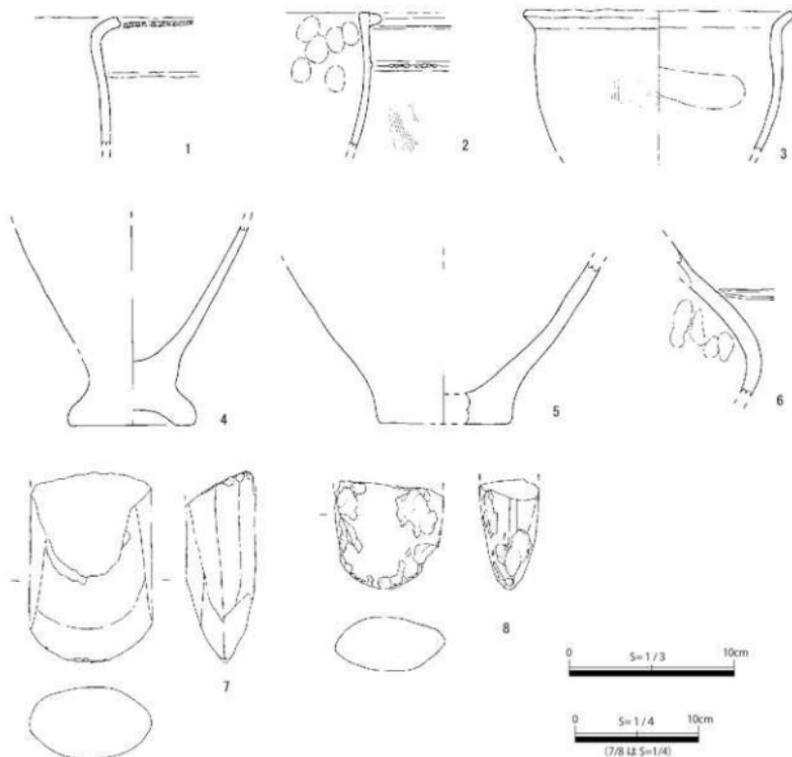


第40図SU01～04実測図(1/40)

**SU02** D-6区南側で検出した。南側の半分は攪乱に切られる。上面の直径は約1.5m、深さ38cm。平面円形で壁はほぼ直立する。遺物は弥生土器片が出土した。

**SU03** D-7区中央やや西側で検出した。上面の直径は約1.0m、深さ88cm、底面の直径約1.6m。平面円形で断面系はフラスコ状。遺物は弥生土器片が出土した。

**SU04** E-6区北側で検出した。北西側の半分は攪乱に切られる。上面の直径約0.9m、深さ64cm、底面の直径約1.6m。平面円形で断面形はフラスコ状。遺物は壺片が出土した。遺物から時期は後期前半以降。

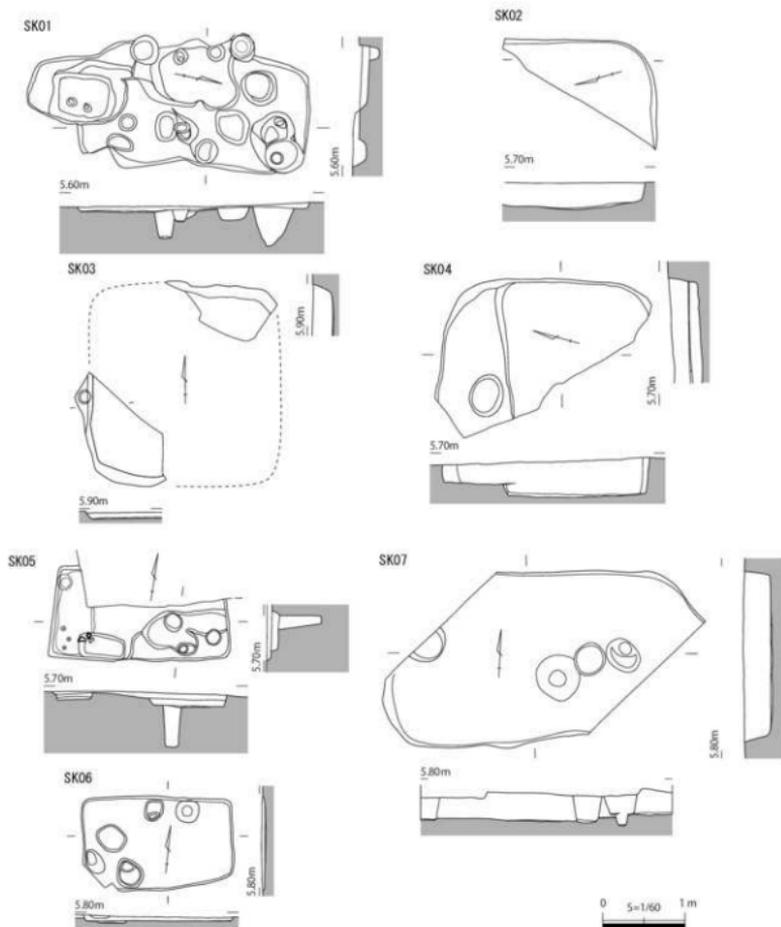


第41図 SU01 出土遺物 (1/3・1/4)

#### (4)土坑

##### 竪穴土坑

竪穴土坑 9 基を検出した。時期は弥生時代中期前半から後期前半。



第 42 図 SK01 ~ 07 実測図 (1/60)

**SK01** A-3区中央で検出した。2.7m × 1.4m、深さ約9.0cm。平面形は方形で、方位は北から10°西偏する。床面は平坦。遺物は弥生土器の小片が出土した。

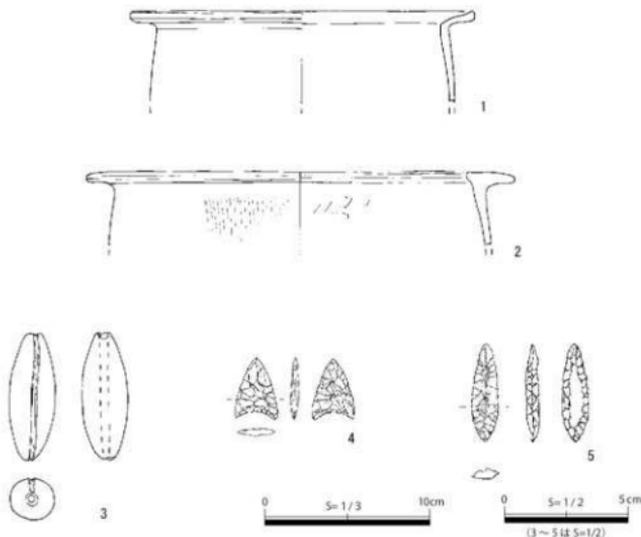
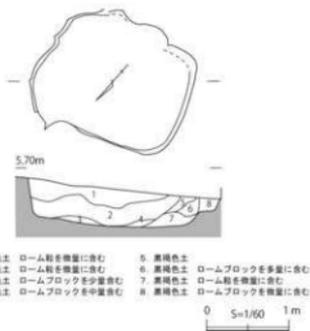
**SK02** C-1区北側で検出した。1.8+ α × 1.4+ α m、深さ35cm。平面形は方形か、床面は平坦。遺物から、時期は中期後半～後期初頭。遺物1・2は甕である。1は「く字」口縁。復元口径25.0cm。2は「逆L字」口縁。復元口径31.0cm。

**SK03** B-8南側からC-8区北側にかけて検出した。2.4 × 2.4m、最も深い箇所深さ60cm、最も浅い箇所深さ10cm。平面形は角丸正方形で、方位をほぼ北にとる。

**SK04** F-6区西側で検出した。西側は攪乱に切られる。2.44 × 1.72m+ α m、深さ43cm。平面形は隅丸方形で、方位は北から17°西偏する。床面は平坦だが、北側から幅約80cmの範囲で、床面から15cm程度高い平坦面をもつ。遺物3は土錘。全長6.1cm、最大直径2.2cmで、紡錘形を呈す。片面に幅2mmの溝が1条めぐり、端部に直径3mmの穿孔をもつ。

**SK05** 西区中央で検出した。北側はSC22に切られる。3.2 × 1.6m、深さ15cm。平面形は長方形で、方位は北から5°西偏する。床面は平坦だが西から東へ10cm程の勾配があり、西端には壁に沿って1.56m × 0.7m、床面からの深さ10cmの土坑をもつ。

SK08

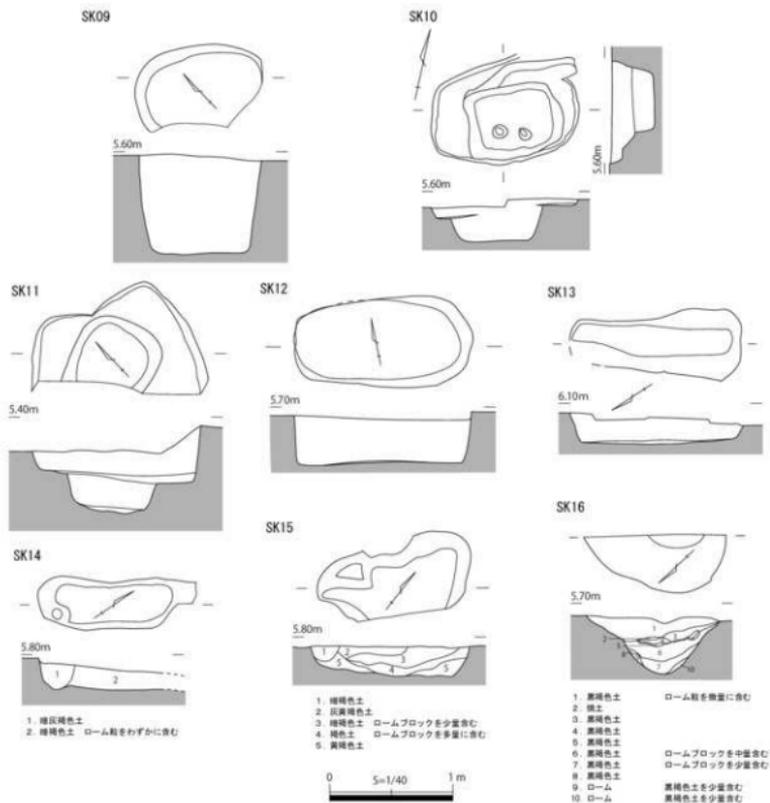


第43図 SK08実測図(1/60) SK02・03・08出土遺物実測図(1/3・1/2)

**SK06** 西区中央東側で検出した。東側は攪乱に切られる。2.64m × 1.75m、深さ 7cm。平面形は長方形。方位は北から 5° 西偏する。床面は平坦である。SK05 と方角を揃えて近接する。

**SK07** 南区中央で検出した。西側と東側は遺構外へ延びる。3.95m + α × 2.08m、深さ 48cm。平面形は隅丸方形か。長軸はほぼ東西にとる。床面は平坦である。

**SK08** 南区北東端で検出した。1.7 × 1.6m、深さ 53cm。平面形は隅丸方形で、方位は北から 13° 西偏する。床面は平坦である。6 は凹基無茎式の打製石鏃。全長 3.0cm、最大幅 2.0cm、最大厚 0.3cm を測る。7 は凸基無形式の打製石鏃。全長 4.7cm、最大幅 1.3cm、最大厚 0.5cm を測る。片面に鎧を形成し、もう片面は平坦面をもつ。刃部の押圧剥離は中程を境に剥離方向が変わる。



第 44 図 SK10 ~ 16 実測図 (1/40)

## 土坑

**SK09** A-2区南端で検出した。1.05 × 0.7+  $\alpha$  m、深さ82cm。遺存状況から平面形は楕円形か。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SK10** A-3区南側で検出した。1.20 × 0.85m、深さ32cm。平面形は隅丸長方形。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SK11** A-7区南端で検出した。1.40m × 0.9+  $\alpha$  mの不整形な方形の掘方に、0.72m × 0.62m+  $\alpha$  の円形の掘り込みがある。深さ55cm。遺物から、時期は弥生時代後期初頭。

**SK12** C-5区北側で検出した。1.32m × 0.56cm、深さ22cm。平面形は楕円形。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SK13** C-5区北東端で検出した。1.34 × 0.40m、深さ20cm。平面形は不整形な長方形。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SK14** C-6区北東端で検出した。1.40 × 8.8+  $\alpha$  m、深さ72cm。平面形は不整形な楕円形。大型の柱穴か。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SK15** C-6南端で検出した。1.3 × 0.65+  $\alpha$  m、深さ21cm。平面系は不整形。遺物は弥生土器の小片が出土した。

**SK16** 南区南東側で検出した。平面形は円形。半径110cm、深さ54cm。遺物から、時期は弥生時代後期前半。

## (5) 柱穴群

A・B区東側に大型の柱穴や柱穴群、布掘り柱穴が集中している。方位に統一性は無く、これらの柱穴から建物などの遺構を復元することはできなかった。遺物はいずれも土器の小片のみで、時期は弥生時代中期後半から後期前半に集中する。

**SP01** A-1区で検出した柱穴群。長軸1.08 × 幅0.72mの土壌に深さ0.96cm、60cmの2基の柱穴がある。

**SP02** A-5区で検出した柱穴群。長軸4.4 × 幅1.1～1.6mの範囲に、深さ約55cm～65cmの柱穴が20基以上集中する。

**SP03** A-7区下層で検出した柱穴群。布掘り部分は長さ1.8m、幅0.8mで、深さ約35～40cmの柱穴が3基並ぶ。

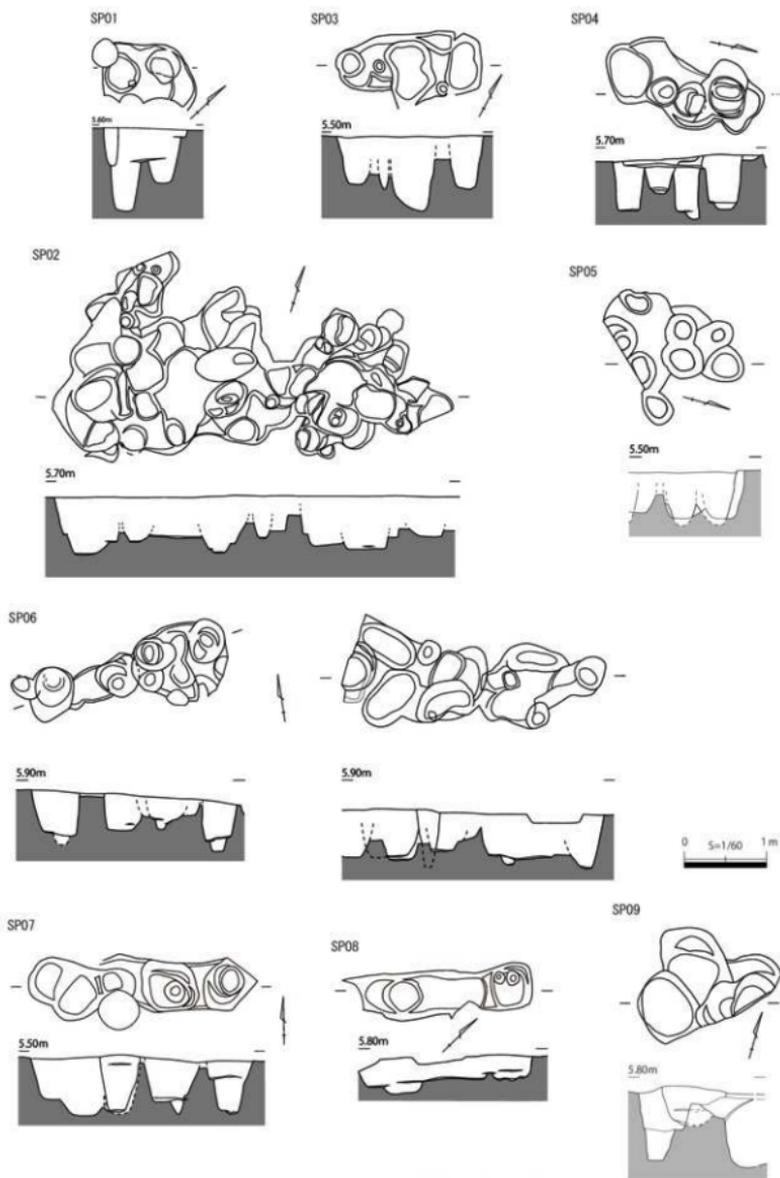
**SP04** B-5区中央北側で検出した。長軸約2.0 × 幅約0.8mの範囲に深さ50～65cmの柱穴が4基並ぶ。

**SP05** B-6区東側で検出した柱穴群。1.5+  $\alpha$  × 1.6+  $\alpha$  mの範囲に、直径40～55cm程の柱穴が7基ある。柱穴の深さはいずれも約70cm。

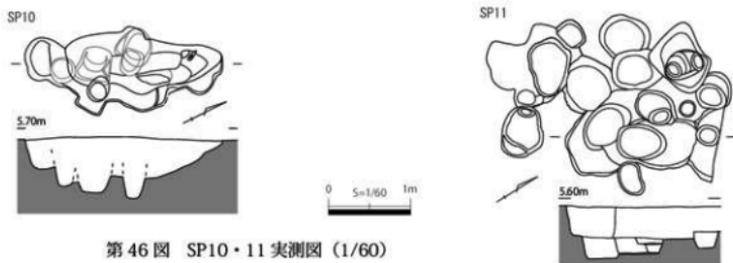
**SP06** B-5区中央南東側～B-6区中央北西側で検出した。一連の柱穴群であり、中間は攪乱で消失する。長軸7.2 × 幅0.6～1.4mの範囲に、深さ約60～65cmの柱穴が16基以上集中する。検出状況から、複数回にわたり立て直しが繰り返された柱穴の集合体か。

**SP07** B-7区北側で検出した。長軸2.8+  $\alpha$  × 幅約0.7mの範囲に、深さ約65cmの5基の柱穴が一列に並ぶ。東西方向に掘られる。

**SP08** B-8区南側で検出した。布掘りの柱穴で、長さ2.3+  $\alpha$  × 幅約0.6m、深さ約20～30cmの布掘りに、深さ26cm、30cmの柱穴を2基もつ。東西方向に掘られる。



第 45 图 SP01 ~ 09 实测图 (1/60)



第46図 SP10・11 実測図 (1/60)

**SP09** C-5区中央東側で検出した。0.9+ $\alpha$  × 1.3mの範囲に深さ約27～60cmの柱穴が3基ある。

**SP10** E-4区中央付近で検出した。長軸約2.4m、幅0.6～0.7mの範囲に3基以上の柱穴が並ぶ。

**SP11** 西区中央北端で検出した。約2.5+ $\alpha$  × 約2.1mの範囲に深さ100～120cmの柱穴が14基以上集中する。

## (6)溝

溝は5条検出した。時期は古墳時代後期と中世のものがある。

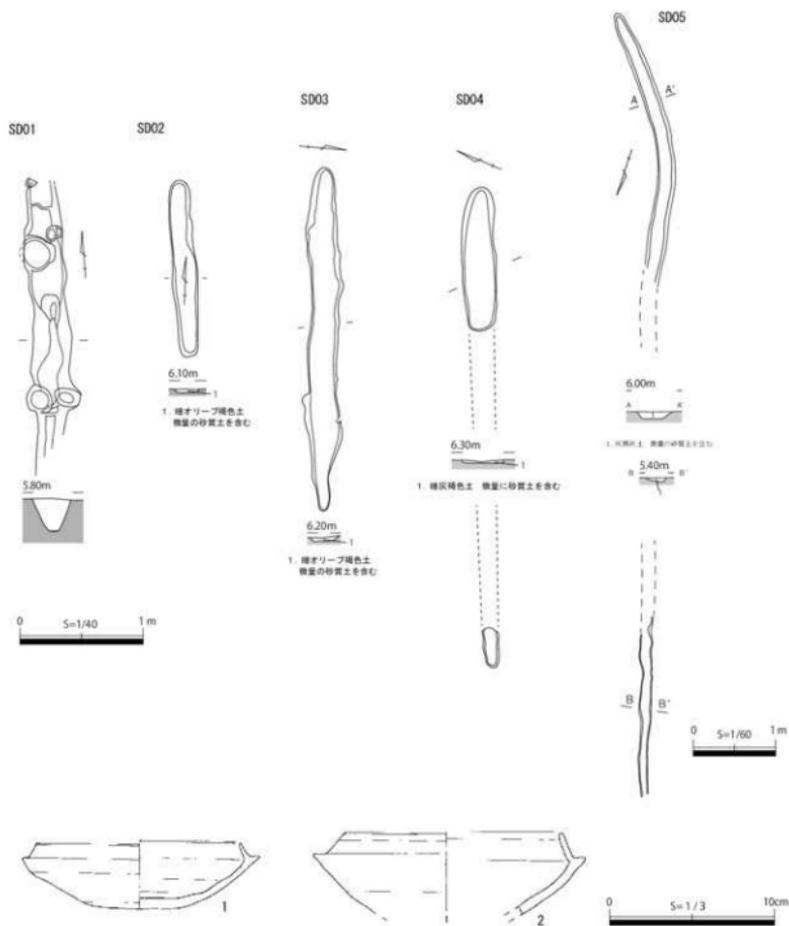
**SD01** B-8区で検出した。方位をほぼ真北にとる。幅45～60cm。底面は凹凸が激しく、深さ30～47cm。遺物から時期は6世紀後半。遺物1・2は須恵器の環。1は口径14.4cm、最大径16.6cm。2は口径12.6cm、最大径14.6cm、器高4.2cm。底部外面にヘラ削りを施す。

**SD02** 西区中央西側で検出した。方位をほぼ南北にとる。全長2.88m、幅約40cm、深さ4cm。

**SD03** 西区中央南西側で出土した。方位をほぼ東西にとる。全長5.60m、幅46～60cm、深さ14cm。

**SD04** 西区中央南側で検出した。方位は北から東に66°東偏する。全長7.84m、幅0.58m、深さ5cm。

**SD05** 西区東側で検出した。S D05を切る。南東から西へ弧を描き、西側は方位をN-37°-W、N-18°-Wにとる。全長5.80m、幅0.4m、深さ16cm。遺物は陶磁器片が出土したが、小片の為明確な時期は不明。S D02～04の埋土もS D05と同じ砂質混じりの灰からオリーブ灰褐色土であるため、S D02～S D06は同時期の溝と考えられる。

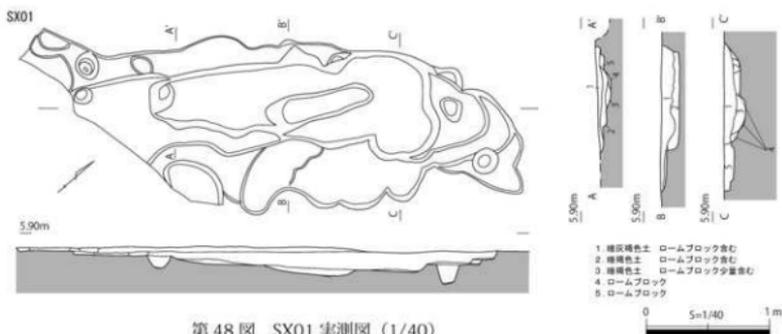


第 47 図 SD01 ~ 05 実測図 (1/40、1/60) SD01 出土遺物実測図 (1/3)

## (7) その他の遺構・遺物

### その他の遺構

**SX01** C-3区南側に位置する。長辺4.1m、最大幅1.4m、最も深い箇所のでき24cmを測る不整形土坑で、中心へ向かい徐々に深さを増す。方位をN<sup>o</sup>-Wにとる。弥生土器片が出土しているが、小片の為正確な時期は不明。



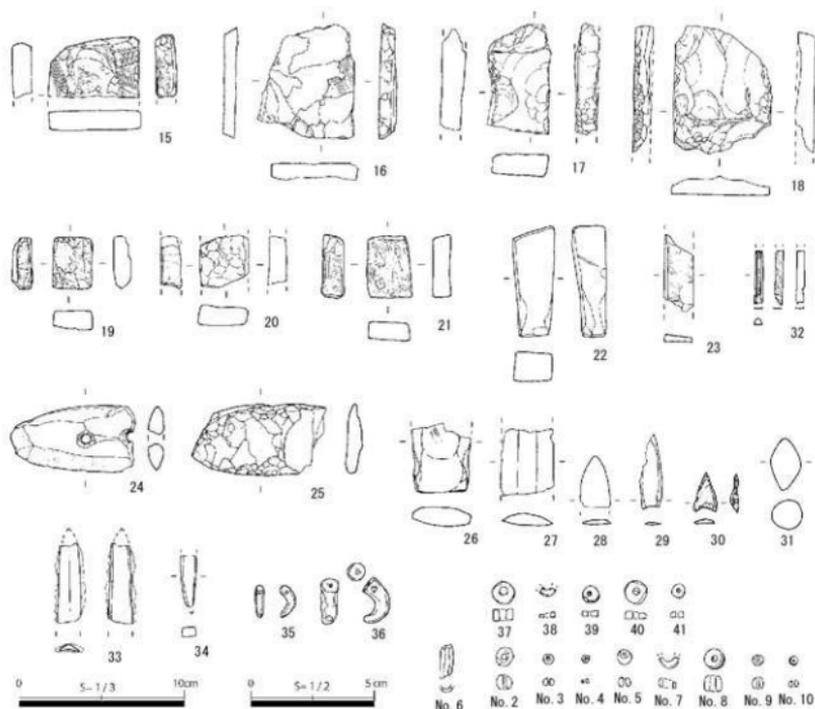
### その他の遺物

1はA-6区表土掘削時に2と共に出土。龍泉窯系青磁I-4a類で、口径16.0cm、器高7.1cm、高台径9.0cm。2は土師皿で、口径5.9cm、器高1.2cm、底径7.2cm。3はA-6区SP143出土。弥生時代中期の蓋で、直径30.2cm、器高10.4cm。4はA区出土。ガラス増埒底部。12世紀頃。5はB-3区出土。台石で、長辺35.4cm、短辺21.6cm、最大厚3.0cm。表面は研磨により平滑で、裏面は自然面。6～11は遺構検出時出土。6は敲石。残存径11.0cm、最大厚7.0cm。7は敲石。残存長13.6cm、最大幅8.0cm、残存厚7.0cm。8は敲石。全長9.6cm、最大幅4.6cm、最大厚3.8cm。9はE-8区包含層出土。敲石。全長93.6cm、最大幅5.1cm、最大厚2.8cm。片面中央、両端部に細かな敲打痕が残る。10はB-8区SK68出土。敲石。全長13.4cm、最大幅5.1cm、最大厚3.6cm。11は遺構検出時に出土。全長11.6cm、最大幅8.9cm、最大厚9.6cm。敲石、もしくは台石状の石材か。12はA-2区SP415出土。柱状片刃石斧未成品。全長12.2cm、最大幅5.1cm、最大厚2.8cm。13はA-2区SP106内で出土。柱状片刃石斧。残存長11.6cm、最大幅3.8cm、最大厚2.8cm。側面は縦方向の研磨があり、刃部は無い。未成品か。14はB-2区SP195出土。太型蛤刃石斧。残存長8.4cm、最大幅7.0cm、最大厚4.4cm。15はA-5区263出土。残存長3.8cm、最大幅5.6cm、最大厚1.2cm。16はC-7区出土。残存長6.9cm、最大幅5.8cm、最大厚1.0cm。17はSU01出土。残存長7.6cm、最大幅3.7cm、最大厚1.5cm。18はSD01出土。残存長8.6cm、最大幅5.8cm、最大厚1.2cm。19はSK16出土。全長3.1cm、最大幅2.8cm、最大厚1.2cm。20はE-2区出土。残存長2.1cm、最大幅1.5cm、最大厚1.2cm。21は全長3.7cm、最大幅2.5cm、1.0cm。久住猛雄氏より、15～18は硯、19～21は研石との指摘がある。22は砥石。全長7.8cm、最大幅2.4cm、最大厚2.6cm。23はF5



第49図 その他の遺物① (1/3・1/4)

区出土。砥石。残存長4.7cm、最大幅2.3cm、最大厚0.4cm。24、25は石包丁。24は南区SP44出土。残存長7.5cm、最大幅4.0cm、最大厚1.0cm。径0.6cmの円孔を2点もつ。25はC-8区SP32出土。未成品。残存長5.6cm、最大幅4.5cm、最大厚0.9cm。全面を敲打する。26はA-6区包含層出土。磨製石剣柄部。凝灰岩製で、残存長4.1cm、最大幅4.0cm、最大厚1.2cm。柄の両側縁に抉りを作る。



(37~No.1065=1/2)

第50図 その他の遺物② (1/3・1/2)

27はA-8区SP406出土。磨製石剣剣身。残存長3.8cm、最大幅3.2cm、最大厚0.7cm。断面は鎗を持たない。28はA-8区SP406出土。残存長3.0cm、最大幅1.6cm、最大厚0.3cm。磨製石鎌切先か。29はE-8区出土。磨製石鎌。残存長4.6cm、最大幅1.8cm、最大厚0.2cm。30は南区出土。打製石鎌。全長2.7cm、最大幅1.8cm、最大厚2.7cm。31はF-5区SP30出土。土製投弾。全長3.1cm、直径1.8cm。32は西区SP89出土。磨製石盤。残存長3.3cm、幅0.5cm、最大厚0.3cm。断面台形を呈し、全面に研磨が施される。33はB-6区SP158出土。残存長3.0cm、最大幅0.9cm、最大厚0.6cm。断面方形で先端が細る。錐状の製品か。34は鉈。残存長4.8cm、最大幅1.5cm、最大厚0.2cm。表面に稜線、裏面に裏すきを持つ。35はB-6区O27出土。勾玉。全長1.3cm、最大厚0.4cm。1mmの円孔をもつ。36はB-7区SP21出土。丁字状の土製勾玉。全長1.8cm、最大厚0.7cm。平面に1.5mm、上端平坦面に1mmの円孔をもち、2つの孔はT字状に交わる。37~41は滑石製白玉。37はE-4区、38は西区、39は遺構検出時、40は西区SP81、41はF-5区SP62出土。No.6~10はガラス製玉類。詳細は次項にて後述する。No.6は西区出土。ガラス製管玉。No.2~10はガラス製小玉。No.2はA-6区検出時、No.3はC-3区検出時、No.4・5はC-7区SP27、No.6・7は西区、No.8は南区SE25、No.9は西区出土。

## 4. 山王 13 次調査出土資料の保存科学的調査

比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

### 1. 調査の目的と手法

山王 13 次調査で出土した資料について保存科学的調査を行った。対象とした資料は石製玉類、ガラス製玉類、ガラス埴塼とみられる土器片である。

石製玉類については石材種同定、ガラス製玉類、ガラス埴塼はガラスの種類をそれぞれ目的としている。古墳時代以前の石製玉類には緑色を基調とする石材が多く用いられる。これにはいくつかの種類が知られているが、時代や産地に傾向や特徴があり、種類の同定は時期認定や流通などの問題と密接に関わる。見た目による安易な同定で間違えると、その後の資料の評価にも影響を及ぼすことから注意が必要である。

近代以前のガラスについては、近年、材質調査や製作技法に関する保存科学的調査が進み、ガラスの種類による時期や地域的な特徴が明らかにされている（肥塚ほか 2010）。古代の玉類は世界的な規模で流通し、中国や朝鮮半島を経由して日本にもたらされたと考えられ、ガラスの種類が直接的な系譜を示すものではない。しかし、時代的な特徴や日本国内での流通に関して、何らかの手がかりにはなり得るものと考えられる。

調査は埋蔵文化財センターの各種装置を用いて行った。

石製玉類は、まず、基本的なものとして見かけの比重を行った。これは電子天秤を用い、資料の重量と、水中での重量測定によって得られる体積を元に算出するもので、石材種推定の一つの手がかりとなる。特に硬玉（ヒスイ）は比重が約 3.3 と、青～緑の石材の中でも大きな数値を示すことから、分析装置が無い環境下で、硬玉か否かの判別は可能である。

次に材質分析として蛍光 X 線分析と、X 線回折分析を行った。蛍光 X 線分析は、試料に X 線を照射し、試料に含まれる元素から生じる元素ごとに特有のエネルギー値を持つ二次 X 線＝蛍光 X 線を検出器で捉え、その元素の種類や量を調べる分析法である。X 線回折分析は、試料に X 線を照射し、試料を構成する結晶から得られる回折 X 線を検出器で捉え、ピークとして表すものである。蛍光 X 線分析が含有元素の同定を行うのに対し、X 線回折分析は結晶の種類や状態を知ることができる。ピークの同定は既知試料のデータベースと照合することで行う。

ガラス資料に関しては蛍光 X 線分析装置と、小玉の観察には実体顕微鏡やデジタルマイクロスコープを使用した。

各装置と分析条件等は次のとおり。

- ・実体顕微鏡 (Leica・MZ-6)：倍率 6.3～40 倍
- ・デジタルマイクロスコープ (Hirox・KH-8700)：倍率 20～160 倍
- ・エネルギー分散型微量部用蛍光 X 線分析装置 (AMETEK・EDAX Orbis)：対陰極：ロジウム (Rh) / 検出器：シリンドリフト検出器 / 印加電圧：30kV・電流値：1000  $\mu$  A / 測定雰囲気：真空 / 測定範囲 0.3mm  $\phi$  / 測定時間 180 秒
- ・X 線回折分析装置 (Bruker-AXS・D8-DISCOVER)：対陰極：銅 (Cu) / 検出器：リアルタイム二次元検出器 / 印加電圧：40kV・電流値：40  $\mu$  A / 測定角度 13～77° / 測定範囲 0.5mm  $\phi$  / 測定時間 900 秒

## 2. 調査結果

### (1) 石製玉類

管玉は重量 0.248g、水中重量 0.107g、比重は 2.32、石製勾玉は重量 0.885g、水中重量 0.313g で比重は 2.83 であった。勾玉は緑と白が混じった色調を呈するが、硬玉の比重は 3.3 であり、この時点でその可能性は排除される。

管玉は X 線回折分析のみ行った。その結果、Quartz (石英) と Microcline (微斜長石) もしくは Orthoclase (正長石) といったカリ長石系のピークが検出された。見た目の情報と合わせて、緑色凝灰岩と考えられる。

一方の勾玉は、蛍光 X 線分析で珪素が最も強く、他にマグネシウム、アルミニウム、カリウム、チタン、クロム、鉄といった元素が認められた。比重測定の数値や見た目の情報と合わせて、クロム白雲母であると考えられる。X 線回折分析ではこの結果を裏付けるように、Muscovite (白雲母) のピークが検出されている。クロム白雲母は大坪志子氏の研究でその存在が広く知られるようになった石材で、九州の縄文時代後期に盛行するとされる (大坪 2015)。その後の時代にも幾つかの事例は認められるが (比佐 2018)、再利用などの可能性なども検討する必要があるかもしれない。山王 13 次の資料の時期については、石材種と共に、勾玉の形態的特徴からも判断すべきと思われる。

### (2) ガラス製玉類

見た目いくつかの種類に分類される。No.1 と 7 は白色を呈する小玉、No.3、4、8～10 は大きさに違いはあるものの青紺色の小玉、No.2、5 は淡青色の小玉、No.6 は板状になっているが、元々は淡青緑色の管玉であったと見られる。白色の玉の内、No.7 は断面の観察で中央部が緑色を呈しており、表面の白色は風化によるものであることが分かる。これに対して No.1 は芯まで白く表面も特に風化した状況は認められず、元々白色であったものと考えられる。

分析の結果、どちらもガラスの主成分である珪素と共に鉛が強く検出される。その他のピークでは、No.1 ではアルミニウム、カルシウム、鉄、銅、そしてヒ素が、No.7 では微弱ながらアルミニウム、鉄、銅が認められる。No.1 は鉛系のガラスとして、検出元素や色調がこれまで分析を行ってきた資料では経験の無いものである。今宿 3 次調査の平安時代墳墓から出土した、赤と白二重構造の小玉では、それぞれの色調部分で鉛と共にヒ素が検出されているが (比佐ほか 2003)、この資料ではカリウムも検出されており、カリウム鉛ガラスの範疇で考えられるものである。今回の資料は違和感のある分析結果であり、資料としての評価は保留せざるを得ない。

No.7 は外観や分析結果が同じ山王遺跡の 11 次調査で出土した玉とよく似ている。色調や成分は弥生時代の鉛ガラスとして違和感が無いものである。

青紺色、淡青色の小玉はいずれもカリウムが特徴的に検出され、古墳時代前期以前に盛行するカリガラスとみられる。その他の検出元素から、青紺色はマンガンを豊富に含むコバルト、淡青色は鉛を含む銅でそれぞれ着色されたものであることが分かる。

No.6 の管玉片であるが、鉛とともにバリウムが認められる。これも弥生時代に一般的な鉛バリウムガラスと考えられる。福岡市や周辺では今宿五郎江遺跡、糸島市の三雲遺跡、平原遺跡などで同種の管玉が出土している。

このように、ガラス玉は1点を除き、弥生時代に通有の資料であることが分かる。

### (3) ガラス埴埴

土器内面に付着するガラス質の物質は、分析の結果、カリウム鉛ガラスという種類であることが分かった。カリウム鉛ガラスは中国宋代で開発されたもので、日本では主に中世以降に流通する。この種のガラスを溶かした埴埴は博多遺跡群で多数出土しており、中世前期に博多でガラス製作の一大拠点であったことが分かる。この埴埴は中国製の水注を転用したものが一般的で、他にそれを真似て作られたと考えられる資料も認められる。同様の資料は少量ながら箱崎、吉塚祝町といった博多近隣の遺跡でも出土しているほか、やや離れた大宰府でも確認されている。それ以外の地域では今のところ出土例は無く、広義の博多限定の技術であったと考えられる（比佐 2019）。

山王遺跡で出土した資料は胴部の破片と見られる。器壁が比較的厚く胎土が粗い特徴は中国製の水柱を転用したものよりはそれを真似た専用埴埴のものに近い。博多と大宰府を結ぶ官道沿いの遺跡である山王でガラス埴埴が出土すること自体、それほど違和感はないが、広義の博多におけるガラス生産がどの程度広がっていたのか注目される。今回の事例はその大きな手がかりとなるものと評価できる。

#### 参考文献

- 大坪志子 2015『縄文玉文化の研究—九州ブランドから縄文文化の多様性を探る—』雄山閣  
肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその変遷」『月刊文化財』566号 第一法規  
比佐陽一郎・片多雅樹 2003「今宿遺跡3次調査出土ガラス小玉の保存科学的調査」『今宿遺跡2—第3次調査の概要—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第738集 福岡市教育委員会  
比佐陽一郎 2018「福岡市内出土石製玉類の用材について」『福岡市埋蔵文化財センター年報』第37号 福岡市教育委員会  
比佐陽一郎 2019「技術導入の窓口、博多」『港津と権力』山川出版社

## IV. 小結

今回の調査では、弥生時代から鎌倉時代前半の遺構が確認され、当該期に連続と集落が営まれていたことが明らかとなった。遺構は、弥生中期から後期にかけの竪穴建物 25 軒、井戸 18 基、大型方形土坑 9 基、多数の土坑や、柱穴、ビット古墳時代から古代にかけの井戸 1 基、溝 1 条、中世の井戸 6 基、溝 4 条を検出した。

弥生時代に属す遺構は、竪穴建物と井戸を中心として確認した。遺物は前期末から終末期までの土器が主体に出土するが、主となる時期は弥生時代中期後半から後期である。弥生時代前期は、本調査地では遺構が見られなかった。後続の時期の遺構から刻目突帯文土器の小片などが出土しており、隣接する 10 次調査や 6・9 次調査では墓域や貯蔵穴などの遺構が確認されることから、周辺に生活域の広がりがあったと考えられる。中期前半の遺構は、貯蔵穴 1 基 (SU01) のみである。10 次調査でも当該期の遺構を検出しており、わずかな遺構のみだったが前期同様集落が広がっていたようである。中期後半になると竪穴建物と井戸が急増し、後期にピークを迎え、最も盛んに集落が営まれた時期と考えられる。本調査地では終末期には遺物・遺構共に急激に数が減少し、遺構は井戸 3 基とわずかなビットのみとなる。古墳時代の遺構は殆ど検出しなかった。遺構検出時や中世の井戸からは古墳時代の坏片などが出土する。唯一検出した SDO1 と併せて、集落は営まれていたものの後世の削平により遺構が消失したものと考えられる。更に時代が下って再び遺構が増加するのは中世で、複数の井戸と溝が確認された。主に 12 世紀頃の遺構が集中する。遺物は瓦器碗、土師皿、貿易陶磁器などが出土しており、現代の削平で消失しており遺構として検出できなかったが、表土掘削時に遺物包含層の暗褐色粘質土上面で青磁と土師皿の集積が見られた。また、当該期の特徴的な遺構、遺物として SE17 から馬の頭部、A-6 区から山王遺跡では初の例となる 12 世紀頃のガラス埴輪が出土しており、当時の祭祀や山王遺跡の手工業生産の様相などが見て取れる。古墳時代と同様に遺構の殆どを失っているものの、かつては調査地全体に中世の遺構が広がっていたようである。

今回の調査では、弥生時代後期前半の SC25 から、床面上から複数の焼土と、炭を含む土坑 (SK17) を検出した。焼土はいずれも高温で被熱し、SK18 は炭を含む。特に焼土 1 は浅い溝と、地下に掘り込みを持つ特異な形状を呈す。調査地内における他地点の焼土は、A-6・7 区、A-8 区 SC05、C-6 区、E-3 区のものがあり、E-3 区の焼土以外は低温で被熱する。SE25、E-3 区の焼土、および土坑を鍛冶関連遺構と想定ならば、概ね村上氏の分類する鍛冶炉Ⅳ類、SC25 内焼土 1・SK17 は 1 類に似た様相を呈す (村上 2007)。しかしこれらの周辺埋土から出土した土器以外の遺物は SC25 出土の砥石と錐状の鉄製品 1 点のみであり、鉄片などの関連遺物は確認されなかった。またいずれも焼土周辺で敲打具などの共伴は無い。ただし、調査地全体で見ると、敲打具や台石などといった石器類は SC20、SE07 などで出土している。山王遺跡の既往の調査で検出した同時期の焼土はいずれも低い温度の被熱による赤褐色化に留まり、いずれにせよ本調査地では特別に高温を使った何らかの作業が行われていたことが考えられる。ただし、これらを鉄器製作関連遺構とした場合、出土する鉄器は調査区全体で 6 点のみと少量である。また、鉄素材や三角鉄片等の製作関連遺物が全く検出されないことなども含めて、特異な状況ではあるものの、鍛冶遺構としての評価は断定しがたく、可能性に留めたい。

### 参考文献

村上 恭通 2007 『初期国家形成過程の鉄器文化』 雄山閣



1) A・D区全景（西から）



1) B・C・E・F区全景（西から）



1) A-1区全景 (西から)



2) A-2区全景 (西から)



3) A-3区全景 (西から)



4) A-4区全景 (西から)



1) A-5区上層全景 (西から)



2) A-5区下層全景 (西から)



3) A-6区全景 (東から)



4) A-7区全景 (東から)



1) A-8区全景 (東から)



2) B-1区全景 (東から)



3) B-2区全景 (東から)



4) B-3区全景 (東から)



1) B-4区全景(東から)



2) B-5区全景(東から)



3) B-6区上層全景(東から)



4) B-6区下層全景(東から)



1) B-7区全景(東から)



2) B-8区全景(東から)



3) C-1区全景(北から)



4) C-2区全景(西から)



1) C-3区全景 (東から)



2) C-4区全景 (西から)



3) C-5区全景 (東から)



4) C-6区全景 (西から)



5) C-7区全景 (東から)



6) C-8区全景 (西から)



1) D-1区全景 (西から)



2) C-3区全景 (西から)



3) D-4区全景 (西から)



4) D-5区全景 (西から)



1) D-6区全景 (西から)



2) D-7区全景 (東から)



3) D-8区全景 (東から)



1) E-1・2区全景 (南から)



2) E-3区全景 (西から)



3) E-4区全景 (西から)



1) E-6区全景 (西から)



2) E-7区全景 (西から)



3) E-8区全景 (西から)



4) F-1区全景 (東から)



5) F-3区全景 (西から)



6) F-4区全景 (東から)



7) F-5区全景 (西から)



1) F-6区全景（西から）



2) F-7区全景（西から）



3) F-8区全景（西から）



4) 南区北東側全景（西から）



5) 南区南西側全景（東から）



西区全景（北西から）



1) SE04 (東から)



2) SE05 (南西から)



3) SE09 (北東から)



3) SE08・土器 1 (北から)



4) SE10 土器 5・8 出土状況 (南東から)



5) SE11・12 (南東から)



6) SE13・14 (南から)



1) SE15 (西から)



2) SE16 (西から)



3) SE17 (東から)



4) SE17 馬骨検出状況 (東から)



5) SE23 (北から)



6) SC06・07 (南西から)



7) SC08 (南西から)



1) SC09 (東から)



2) SC11 (南西から)



3) SC12 (北から)



4) SC23・24 (北から)



5) SC17 (北西から)



6) SC18 (南東から)



1) SC22・23 (北から)



2) SC25 内 焼土検出状況 (北から)



3) SC25 内 焼土 (北から)



4) SC25 内 焼土● (北から)



5) SC25 内 焼土 (北から)



6) SC25 内 焼土土層断面 (東から)



7) SU01 (北から)



8) SU04 (北西から)



1) SE04 遺物 8



2) SE05 遺物 5



3) SE07 遺物 1



4) SE07 遺物 2



5) SE10 遺物 4



6) SE10 遺物 5



7) SE10 遺物 8



8) SE11・12 遺物 2



9) SE11・12 遺物 3



10) SE11 遺物 1



11) SE15 遺物 1



12) SE15 遺物 2



13) SE15 遺物 1



14) SE 15 遺物 2



15) SE15 遺物 3



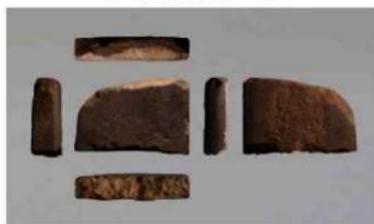
1) その他の遺物① 5



2) その他の遺物① 11



3) 西区出土石器



4) その他の遺物② 15



5) その他の遺物② 16



6) その他の遺物② 18



7) その他の遺物② 19



8) その他の遺物② 21



1) SC17 遺物 1



2) SC22 遺物 2



3) SE10 遺物 10



4) SC25 遺物 9



5) SE05 遺物 7



6) SE23 遺物 7



6) SE25 遺物 10



8) SK05 遺物 3



9) SK09 遺物 7



10) その他の遺物② 24



11) その他の遺物② 31



12) その他の遺物② 32



13) その他の遺物② 33



14) その他の遺物② 35



15) その他の遺物② 36

報告書抄録

ふりがな	さんのういせき11							
書名	山王遺跡11							
副書名	-山王遺跡第13次調査の報告-							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1389集							
編著者名	三浦悠葵							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2020年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
さんのういせき 山王遺跡	ふくおかさんのう まちようめい 1,30-2 福岡市博多区山王 2丁目30-1, 30- 2	40132	2379	33° 35' 03"	130° 25' 57"	20171127 } 20180727	1,685	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
山王遺跡 13次調査	集落	弥生時代・古代・中世		堅穴住居・土壇・溝・ 井戸	弥生土器・須恵器・土師 器・瓦器・貿易陶磁器・ 石器・ガラス小玉			
要約	<p>山王遺跡は、福岡平野東部に位置し、御笠川と那珂川に挟まれた丘陵地上に立地する遺跡である。本調査地点は遺跡東端に位置しており、南側に近接する第10次調査地点では弥生時代後期から古墳時代初期を主とする集落が検出されている。今回の調査では堅穴住居、貯蔵穴、井戸、柱穴、土坑、炉跡などの遺構が検出された。調査地南側は特に遺構が集中する傾向にあり、大きな柱穴が多数検出されることから、数棟の掘立柱建物の存在が想定される。遺構の時期は主に弥生時代中期中頃から後期に属すが、古墳時代の溝・井戸、中世の井戸も検出した。遺物は弥生土器、磨製石斧や石鏃、玉類などの石製品、ガラス製玉類、鉄器、土師器、陶磁器などが見られ、井戸からは獣骨、木材等が出土した。</p> <p>以上から、本調査地点とその周辺地域では弥生時代を中心として、古墳時代から中世にかけて居住域が形成されていたと考えられる。</p>							

## 山王遺跡 11

—山王遺跡第 13 次調査の報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1389 集  
2020 年(令和 2 年)3 月 25 日

発行 福岡市教育委員  
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1

印刷 株式会社トータルブルーフ  
福岡市南区唐木 4 丁目 6 番 3